

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
0
1

白はく
羽う
箭せん

鏡
花
小
史

目
次

竹たけ
子こ
姫ひめ

謹きんじやう
上じやう
再さい
拜はい

草くさ
のの
灯とう

松まつ
毬ぼっくり

榮ささ
螺え
のの
殻から

惡あく
權ごん
太た

怨うら
恨み

古こ
城じやう

姫ひめ
神がみ

簪かんざし
のの
質しち

狐きつね
格なごう
子し

淚なみだ
橋はし

月げつ
下か
のの
的まと

竹たけ
子こ
姫ひめ

「おゝ、吃驚した、まあ。」

「や、こりや、是は何うも、」と突當つたのが身を開いて、對手の女に二ツ三ツ續け様にお辭儀をしたのは、浴衣だけれども角帯で商人風の分別盛、濫に狼狽へて、往來の者に打附りなどすべき人體か、人混雜でもあることか。會津若松の町端れ、名にし負ふ鶴の城の大手の趾が程近く、宵だが四邊に人もない、葉月の末の月夜である、而已ならず、當夜は全市に催しあり、場末だけれども、祭禮の時に齊しい、軒提灯さへ點してあるのに、怪しからざる周章やう。

「何うも、飛んだ粗相をいたしましたして、申譯もありません、何處ぞお痛めなさりませんか。」

「可うございますよ、否、ついあの唐突で驚きましたもんですから、大きな聲をして、何處も何ともございませぬ。」

おとなし扮装の容色佳、二十ばかりなのが内端に云つた。此の騒ぎに其の連なる娘二人、關の戸を鎖されたやうに同時に傍に立留まつた。いづれも同一年紀頃の、一人は二ツばかり少からう、位も品も打上つて、房々とある髪を高く、浮世繪の元祿島田を櫛巻に崩したやうな束髪で、其の艶やかな緑の中にも、雪の如き手の指にも、晃々として輝く球あり、銀河あからさまに流れたれば、水かと紛ふ地の上に、白き光に包まれて、月の中なる立姿。羅の膚も後れ毛も、唇も裳もそよ／＼と、雲に駕したる風情である。知る是、鶴の城若松の城主、舊藩侯何其伯の息女竹子姫。附添つたのは侍女であつた。

姫に引添うて立つたのが、傍を離れて、突當られた朋輩の身近に寄り、只管疎忽を侘びて居る町人に、

「もし、あなた、何にお驚きなさいましたの。」

「へい、」と又小腰を屈めて、仰いで其の侍女の顔を見たが、目も据らず、きよと／＼する。

前の娘が口を添へ、

「大層お急ぎのやうではございませんか。何うぞお構ひなく、何ともいたしはしませんから、」と云ひかけて、一寸襟を扱いたが、両手の寂しいのに心付いて、内向いて足許を。落した團扇が灰白く砂描の繪に似たり。

「まあ、私、仰山な。」と袂を取つて、腕を清く伸して拾ふ、高島田か、男の帯のあたりへ下つたので、慌てて屈み、

「はッ私がお取り。や、これは早や、何うも恐縮で。否、何、貴女様、道を急ぎました次第では無いのでござりまして。」

「一寸、あの、」

前なるが、拾つた團扇で口を蔽ひ、退いて黙つたにも關らず、後の小肥に肥つたのは、帯の幅廣く前へ出た。

「私は何か吃驚なすつて、其で駈出しておいでのやうに存じますが、」

「へい／＼、」と揉手をし、對手が饞舌つて呉れるだけ、もの云ひ好き／＼うに口軽く、

「お察し通り、いや、案の定、怯られましたな、驚きましたの何のと申して、」

膝に両手を下げたまゝ、半身を後に捻ぢ、又見返つた、須磨明石、薄霽のかゝつた鶴の城と、

月の光の竹姫とを、角振分けて左瞻右瞻、蝸牛は一竦みで、
「いやも、驚きましたの、何のと申して。」

「あなたお城の方から駈出しておいでぢやございませんか。辻か追剥にでもお逢ひなすつたやうな御様子でしたわ。」

お定といふ肥つた方、思ふ處あるらしく、仔細を聞きつゝ、是も透すやうに大手の松。松は城の濠端に、低く飛ぶ鵲に似て見えるのである。

町人は苦笑ひ、

「辻斬處ぢやございません。然やうなものなら、何の恚う慌てるには及びませんので、地體私一人で參つたではないでございませぬ。」

「飛んで入らつしたたのはお三方のやうでしたね。」

「御意でござりまする。三人、然も宮相撲の關取が一人。はて、彼奴等、」と、やう／＼腰を上げ、腋の下の汗を懐から直に手拭をまはして拭いて、前後をニすと、遙か彼方に、凸凹の石を見るやう、土堀に附着いて蹲める影あり。

「は、は、彼に見えます。もう一人、や、又彼に居りますわ。」
 姫が「んだ七八間後の方、軒の下に背を見せて、白の兵兒帯を長く、紺足袋、浴衣がけ、腕まくりで、纒三尺ばかりな處を、ぶらり／＼、行つたり、來たり。」

「助役さん、おい、役場の先生、」

此方を向くと、まともに月に、此際、大にてるから、知らぬ顔の半兵衛で、聞えぬ耳の丁助也。

「私ばかり、何うもこれは、」
 向ひ直つて大聲に、

「おゝい、關取。いやも、頼母しからぬ、全體關取なぞは、最初一人で引受けるなんのと云つて置いて、いざと成ると、まあ、何といふ……、」

くるりと廻つて、

「助役先生！」

突當られた當人のお君といふのが笑止がり、

「まあ、可うございますよ。」

「可い段ではござりません。夜分御女中方に打附りなんぞいたして、いゝ年紀を仕りましてな。」

でござりまするが、此で私が未だ一番落着いて居りましたので、關取の怯かされやうと來ました日には、其こそ貴女様方に突當る處は通越して筒抜けに向うへ飛んだでござります。役場の先生と來ちや、腰が脱けて、地を這つたでござりますで、お體には觸らずに濟みました。唯、私がもう面目次第もござりません。」と頻りに繰言を云ふのである。

「さあ、皆、」と一聲、胸を斜に、身を横に、指環に、簪に、黄金鎖に、月の光を颯と一浴び、姫は前途に立直る。

「姫様、」とお君が留めた。

お定會釋して、

「少々、何でございますから、一寸お待ち遊はしませ。あの、お前さん、お城の方で、何にお驚きなすつたのよ。」

「いやもう、何處ぢやございませ。其のな、今一足で御門へ入らうといたします、石垣の曲り角で、背後から出ましてな。」

「えゝ、」と、お君は口に犇と團扇を當てた。

「關取が眞中に居りました、其のな、三人が並びました中を通

り抜けますまでは普通の女でございました。

大の男が三人でさへ、誰ぢや、彼ぢや、瀬踏の押附合だに、女が何と日が暮れて、と思ふ間もなかつたでござります。

ずつと前方へ行き抜けて、草の中に立ちましたつけ、屹と振返つて私どもをぞつと見ましてな、

又もや不氣味さうに背後を見たが、

「えゝ、げら／＼と笑ひました。

いや其聲の異變な、凄いことゝ申したら、何とも早や、幅が何のくらゐござりましたか、體を引包んで緊めつけるやうでな、耳

へぶんと来て天窓へぐわん、

と町人頭を引込ませ、胸を反しながら脳天へ手をびたりと當てる。

三

「何が何やら、唯もう夢中で駈出して參つたでござります。」

一目見ても推量の出来る、竹姫の風采に、言はずとも其と悟つたから、侍女にもものいふのだけれども、恰も、はッ恐れながら、凡て申上げ奉る調子であつた。仔細を聞くや否や、ぎよつとして、二人は顔を見合せた、お定が、

「まあ、何でございます、あなた、其の女といふのは、」

「然れは、解せませぬてい。」

と大眞面目。

「皆さん。お三人とも御覽なすつたんですか。」

「見ましてございませうとも。おゝい、」と再び前後を呼ぶ。

「可うございますよ。」

「矢張處のか、女房さんなんですか、」とお君は寄添つて細い

聲。

「でござりませうなあ、」とばかり間の抜けること夥しい。

お君は町人の其の顔を、差覗くやうにして、

「何處のおかみさんでございませうねえ。」

「ございますかな。何處かのおかみさんでございますかな？」

「然うですね。」

言が途絶えると、ボンと鐘。

お定も薄氣味が惡さうに、

「何うしたと言ふんでせう。」

「何でござりますよ。別に八百屋のかみさんと申すわけではあ

りませず、質屋の御新造でもござりますまいに因つて、いづれな、

變なものでござりますかな。」

「おばけですか。」とお君は、團扇に風が觸つて、わな／＼。

「一寸々々そんな人に會つた者が有るのでせうか。」

「別に、誰かと申して見たと言ふもないでござりますが、一

體よくお濠へ落ちましては人が死にますので、中には覺悟をした

投身も多々ございますが、何と云ふ事なしに、お宮參詣の婦人が

貴女、三枚襲の紋着で、濠端を通りますと、土手の草が裾を引き

ましたやうに、する／＼と落ちまして、唯お濠の水の上へ横にな

りましただけ。

眞晝間、人通りはござりませなんだが、多勢伴が附いて居りまし

たで、あツといふと直に引き上げました。沈む間さへございませ

ぬ。紅も流れず、白粉も綺麗なまゝで、最う彼の世へ参つたことがございます。

一時は、此の大手下を豆腐屋が通りかゝりますと、石垣の中から、草刈が一人、波に追はれたやうに遁げ出して來まして、躍上るやうに飛んで落ちて亡りました。年々人の損じますが、十人下なことはござりませんので、此頃ぢや、もう草も生え次第、晝だつて誰も入るものは無いでござります。」

「厭ですなえ。」

「厭ねえ。」

「はい。」

「行かうよ、さあ、出かけようね。」と竹姫は聞かぬ態、心にかゝることは無い様で、敢てものともし給はず。

其の御袖に引附けられ、二人は左右へ摺寄つた、が、お定は踏留るが如くにしつゝ、

「一寸、一寸、そんな恐い處へ、あなた方、構はないで出掛けたんですか。」

「それは、もし恚うでござります。えゝ、今度、伯爵家お姫様が、

氣を兼ねたか、口籠つて、

「はい。はじめて當會津へ御入國遊ばしましたに就いて、あなた様方も御存じの通り、市中残らず、提灯を點けまする、旗を出しまする、花火は揚げまする、催事やら、造物やら、十年以來の賑でござりまするが、私どもゝ又唯ほんの心ばかり。」

謹上再拜

四

「手前佐野屋喜平と申しまする、御城下の小商賣でござりまして、懇に仕ります者どもと相談をいたしましたすが、何や彼と申さうより、豫て寄合うて修行いたしましたる弓術の會を一ツ、盛に催しまして、陰ながら姫様御入國をお祝ひ申上げませう、と大町の龜遊軒と申すので三日間な。いやもう、嗚呼がましうござりませんが、其の繁盛なこと。武は盛なお國柄、弓矢の道は唯今以て廢りません。舊藩士の方々は別といたし、唯我々平の町人百姓だけでも、四五十人は集りまして、一昨日から押通し、手手が失敗一千も仕りましたが、いやはや、其の。

平生運動がてら、尺的を、ぼんと射抜きますやうなわけには参りません。あづちが蜂の巣に成りまして、射割の板は曲みもしませんで、吹出しさうな顔をして居ります。

あぐねましてな、倒れるやら、寐るやら、大概ぐツたりと、筋が弛んでしまひました。丁ど晩方でござりますが、戸外に立つた見物の中から、二十四五の瘦方な、脊のすらりとした、色の淺黒い、眉の濃い、目に美しい光のある、小瀟洒した書生體の人物が、麥藁帽子を取りながら入つて見えて、誰方も失禮ですが、一本と云つて、客弓のな、三分五厘重藤といふのをピーン。

矢筒を引寄せて、片肌脱ぎに身構へました、射前の見事さ。けれども何、飛入の外矢、何程の事があらうと見て居りますと、やがて番へて、キリノと引絞りましたが、そりやこそ砂が立つと思ふと、何うでござりませう、カチリと音がして、射割が、ぱツノと消えましたわ。

やんやと申す内に、立續けに五枚割りまして、悠々と膚を入れ
て、あつけに取られました、帳場へ挨拶をいたしますと、

佐野屋は胸を引合せ、

「恚う其の衣紋を直しまして、凜々しい好い男子でござります、
帽子も被らず、抱へながらフイ、と出て行くでござります、切こ
そ。

何とか「云ふ槍の先生は、夜中に裏庭で二間柄をりう／＼と抜
いて居ると、穂尖へ女の生首が喰附きましたとか申す事、ものは
氣で魔がさします、尋常ごとではあるまい、何處で消えるか跟け
て見い。

合點だと申しまして、町消防夫のおさきばしり、駈出しの勘次
といふ筒先が飛んで行きましたつけ。やがて目の色を赤くして駈
けて歸り、大變々々、途中から帽子を深くして、靜々歸るのを、
見隠れについて行くと、お城の中へ入つて、石垣のかけにかくれ
る、日が暮れた、と大息を吐くでござります。

そりやこそ御維新の時分鬼と呼ばれた會津の大将の、若い倅そ
ツくりだったと云ふ老人もございますれば、彼に居ります、役場
の助役などは、宇賀神堂の白虎隊の木像、何番めかに、寸分違は
ぬのが有ると申します。

又つい先頃、連中が射藝上達の祈願を籠めまして、白木の弓に
白羽の矢を野郎構の摩利支天尊天に奉納を仕りました事もござり
まする、何につけても弓矢神の御感應、追かけて拝み申せと、直
に參るつもりにはいたしましたなれども、右の人とりが附いたお
城でござりますで、第一手前二の足でござりました。

然うすると、何うでござります。四斗樽が手を出したやうな、
ヤ、奇代な手附をして、此方を招いて居いまする、あれ、何うで

ござります、やれ、やれ、やれ、やれ、
「物々々々。」 姫は心易げに、關取の影法師を見て微笑み給へり。
侍女たちはそれ處か。

五

「奴、大町の米屋の信州者で、小力がござります。矢張龜遊軒の連中でござりましてな、胸を突出して、どんと来い、何でも此處で應へて見せる。私が附いて居れば、根こそげ城が飛ついても恐いことはごんせぬえ、などと申します處から、物好きな助役と三人、たうとう出掛けましてござりますが、途中で灯が点きまして、此處を通りました時分、もう月夜になつたでござります、はい。
いよ／＼お城の石垣の中へ踏込まうといたしますと、前申しました通り、瀨踏を譲り合つて居ります中に、右の、すうと顯れて、すらりと立つて、げら／＼でござりませう。いやもう、お話し申すさへ寒氣がいたしまする。」語り果てると、ついで出すべき言も無げに、月の影と／＼もに白け返つて默然と成る。

唐突にはつくしよい。

「はい、」と妙な顔をして、むぐ／＼とやつて、落着いた口に手をあてて、

「はつくしよい。」

けるりとして、佐野屋喜平。

「え、而して貴女様方は、これから何方へかお納涼でござりますか。な。」

お定が折を得たりと云ふ見得で、

「納涼に入らつしやらうとおつしやるんですかね、姫様、」と密とお顔を見て大いに諫めむと慾する處あるものゝ如し。

姫は耳にも入れ給はず、霞の風に靡くが如く、はら／＼と五足六足、佐野屋の身近に、其の近優りする姿を寄せ、頷くやうに頭を下げて、

「然やうなら、難有う。」

「はーッ。」

恐入つて佐野屋、斑禿の彼方此方一禿百兩の分別と、自ら稱する、通計五百兩の天窓惜氣もなう、爪尖を手で握らんばかり、魂が腰に据わつて、帯の結目か、ぴんと撥ねる。

「おいでな。」と潔よく、言放つが如くに遊ばし、おくれ毛を、吹かせながら、内端に軽き雪駄の音。

はや五六間露の上に、羅淡く進み給へば、それとお定。

後れてお君が、團扇の柄を固く取つて、追ひ續いて、お定に摺りつき、小さな聲で、

「一寸、矢張、何うしてもお城へおいで遊ばすの。」

「は、ですからね。」

お定は少し急ぎ調子、

「姫様、姫様。」

下界の天女はむ霞の中から鶴ヶ城の大手道、見通の廣場をずん／＼。恰も艶ある雲を渡つて、次第に近く、城の松の梢に上るか

と怪まるゝ。一步が一町も後るゝやうに、侍女はあせつて、喘ぎながら追附いたが、はやくも草の露裡に溢れて、濠は渾沌として一帯石垣を浸して暗い。

「何よ？ 大きな聲をして、人が出て見るわ。」

呼ぶのを聞流して竹姫君、はじめて立停つて制し給へり。

「人ツ子一人居りはいたしません。姫様、お内家を出ます時から、私どもが申上げましてございますが、お危うございますから、お見合せ遊ばしませんか、ねえ、お君さん。」

「然うですともね、誰も参りません處へ、夜分お出で遊ばして、どんな間違がございませんとも限りません。不意に突當られましてばかりでも、私はまあ、どんなに吃驚いたしましたしてございませう。」

見返れば遙か眞直に隔つて、此折から助役と云ふのも、關取も、佐野屋と一に成つたと見え、ちら／＼月の影燈籠、黒き人影動きつゝ、同一處を立去らず、姫を憂慮ふ氣勢である。

六

お定それと心付き、

「まつたくでございますよ。お君さんだつて、宿を出ます時は、こんなお月夜に、どう間違ひましたつて、人に突當られようとは

思ひがけもいたしません。

それでございますから、ひよつとした事で、又どんな間違が無
いとも申されませんし、あれが町中でございましたから吃驚した
だけで、濟みましたやうなものの、もしか姫様。恐しい噂のござ
います、お城で御覧なさいまし、目をまはさないでは濟みませ
んではございせんか。ねえ、お君さん。」

「はあ、然うですとも。」と云ふ中も震へて居る。

「それに三太夫様なり、誰方が、男の方がお供でもいたして居
りますれば、未だしもでございしますが、」
未だ言ひも終らぬに、

「あゝ、お前たちを連れて行かうと言ひはしないよ、安心おし
な。」

と姫は莞爾。

お定目を圓くして、

「ですけれども、」

「ねえ、お定さん、」

「否、いゝえ、頼んだつて連れて行きやしませんよ、直ね、」

姫は愛々しく打傾き、

「直私歸つて来るから、二人して此處に待つておいで。そんな
臆病な者と一所に入ると、風が吹いても倒れさうよ。まあ、お君、
お前震へておいでだね、確乎おしよ、何だねえ、小兒見たやう
な。」

「私は、私は宜しいのでございます。姫様が、」

「何ともありやしないわ。ね、お定も可いかい、直歸るから、

お君、お前、其の團扇をお貸しよ。」

「はい、」

「蟲が集ると煩いから。」

姫はお君の手から参らせた團扇の柄を、口に銜へてうつむいて、
腕を曲げて後毛を搔上げ給ふ。

東京なる御館の庭を漫歩きの、池をめぐつて築山にかゝらせ給
ふと敢て違はぬ氣色を見て、お定是はと、あきらめながら推返し
て、

「姫様、それに、あの、姫様は東京でお生れ遊ばし、今年お十
八で、はじめて此方へおいでなさいましたのでございますから、
些ともお城の中の御様子を御存じではございますまい。井戸やら、
釘やら、あの、焼跡へだつて、うつかり入るものぢやないと申し
ますのに、夜分ではございますし、」

「月夜ぢやないか。」と、澄して松ヶ枝を御覧ずる。

「ですが、お城趾でございますもの、空井戸やら、抜穴やら、
錆びましても刀の折れたのなんか、どんな處に落ちて居りません
とも限りませぬ。」

「私ね、繪圖面でよく拜見して、本丸の處、二の丸の處、お濠
のやうすも、お炊場のことも、井戸のある場所だの、お天守のあ
つた所、誰が何處で討死をなすつたと云ふ事もね、あの何とかい
ふ奥女中が、可哀さうに身體を洗つたまゝ見えなくなつたといふ
ね、」

二人又ぎよつとする。

「湯殿のあつた處まで、皆知つて居ますよ、此の團扇でかうや
つて、」

薄は右へ葉、左へ穂。

「草を分けて行くんだよ。」と直に蓮歩を移さるゝ。

「あれ、姫様。」

「お君さん、こんな時に、秋山さんのお嬢さんが居て下さると
可いんですね、あの方だと、どうにかしてお止め申し上げるんだ
けれど。」

「眞實ね。」と染々云つた。

「全くよ、今夜は音楽會があつて行つて在らつしやるんだもの、
市長さんなんかもお衣さんのヴァイオリンを聞きにおいでなすつ
たと云ふのに、姫様も行らつしやれば可いぢやあないかね、おや、
どうしよう、づん／＼おいで遊はすよ、あれ、お君さん何うしよ
うね。」

草の灯

七

湯川の瀬の音、松の聲、摩利支天の森の下を、石燈籠に並んで
二人、梢洩る月に影を投げて、風に樹の葉の揺るゝとともに、ぶ
ら／＼歩行きの野良調子。

「やあこれ、主や大分長い事拜んで居たが何を願うただよ。」

「言はいでも知れたことんし、大願成就だ。」

「金持に成りたいかの。」

「まゝ、そんなもんぢや。だがの多十、」

「やあ、」

「金子は慾しいけど、私何も金持さ成りたくはねえことんし。」

「多十なるもの領いて、」

「知れた、知れた。はあ主が大願ちうは、東山の女が事だつペや。」

「づんと、胸ぢや。」と前はだけの胸を叩いて見せて、肩にかけた手拭の端をなぶる。在方の息子風、腰に一挺の尺八を筈高にさして居る。

岩代國のお百姓、かやノと打笑ひ、

「措けちや、彼は新妓で全盛ぢや。角を握つて暴牛をおさへればとツても、主等が手に合ふことでは無いの。其にの、お互に、在所の名が頼母しくないことよの。野郎がまへと云ふでねえか。なあ、これ、野郎がまへと云へば、野郎さおかまひと云ふことぢや、女ツ兒は寄つかねえと、天道様おつしやりつた。それよりは、やあ、三吉。」

「何だのし。」

「手近な處で、出来べい相談があるに氣はねえか。」

「主が相談は何時出来ぬことに極つて居るわし、大方又何だつペい、西瓜のたねを銀貨にするちう事だつペい、主、じゃうだんものだあ。」

「おツと言はぬ事、犬の兒だ、」

と暗い中を潜つて出て、

「そりや、境内を出れば、もう、其の内へ入るも同一ぢや、其處な茶店のお房ツ兒よ。」

「それ見さい。」

「はゝはゝ、これ、見さい、さいて呉りよ。」と多十、居合腰になつて、肩を立て、體を斜めに指を撥ねて、三間柄を下段の殺勢、無手で鳥刺の眞似をして、熟と見込む。

餌刺棹なら尖の届きさうな間近な處、此の御堂は場末の町から湯川に添ひ、野郎構を通つて、温泉の勝區東山に行く、途中一町ばかり引込んで、淺いが森の中に在り。左右は田圃で、北の方遠く飯盛山の裾に展けた、折から月の、中空に、黒雲を捲上げて、鱗の色銀の如き一條の龍の蟠るは、城の搦手なる樹立の中に高く残つた石垣の名残である。西の畠を後に控へて、露も星も見え透いた葎篋圍、灯影薄の穂に映り、葉は翠に、根は黒く、破れた岐阜提灯のやうな小屋は、あはれな娘の掛茶屋であつた。

多十ヤツと氣合を入れ、
「はて、わけなしの、忝し、寐鳥を刺いて取るやうなもんぢやが、なあ、三吉、主が云ふ通り出来ぬ相談、西瓜の種でしよことがないかい。」

「駄目なことんし。」
「それにしても好い容色ぢや、これはあ、主の前だが、東山の新妓さが鬪斗をしても追つかねえだよ。」

「如才も無ア癖に何だとえ。越後もので無えだで、角兵衛はすぬとこと。」

「吐かす！」と黄な口を開けて笑ひ、多十腰を伸して、づいと立つたが、わあーと、しツこしの無い驚の聲がぼやけて、思はず背後へ一足退く。

足許の土から湧いて出たやうに、土とすれ／＼、ちよろ／＼と白きものあり。

「何だつぺいや。」

三吉腰なる尺八を抜いて、追取刀、うつむいて透して見て、
「犬ころ、ころ、ころ、ころ、犬の兒だんし。」

八

見さい、あれ向うの松の樹の根ツこの處さ、いかい事ころ／＼
して、眞桑瓜が轉がつたやうでねえか。」

多十も及腰に瞻一つて、

「はあ、矢張犬ころだア、はてな、此の節の不景氣で、皆持つ
て來て棄てるずらあ。」

「人間の棄てられたのも居る處ぢやで、犬ころを放すにも、丁
ど可かつべいことんし。」

と少いに悟つたことを云ふ。

「惜い別嬪だに、内密でお房ツ子の店さ休まうで無アか。男知
らずに、もう今年は二十を越したつぺ。對手慾しかつべいことは、
主とかはりはあんめえと思ふだがね。」

「言はつしやることよ。」

「その上、今年の春は一人のおふくろを亡くなしたで、嘸心細
く寂しいことだつぺ、そりや此の、」

と多十薄を握つて、手の露を額に押當て、

「觸らはこぼるゝ風情なりけりと言はあ。主唄の文句で知つて居べい。處で主さ尺八の吹ける藝人といふもんだで、むかうから袖を引くことよ。其代にゆで玉子を二ツ取つて、ラムネを飲んで、主が其の拂をするだぞ。」

「御造作でござりますだ。」

「はゝはゝ、駄目べい言はねえで、内證で遊ぶべいよ、誰も來はせぬ、心配は無アと思ふ。」

「措けちや、措けちや、」

三吉些と歩を早うし、

「お房ツ子が許さ、腰をかけて、ひよつとか知れべいなら、會津中に附合人の無くなる事さ、主知つて居べい。それにはあ疾うにから、ならずものの權太めが、内々手に入れて居るちうだぞ。何方も人外だで、似合だつべいよ、なア多十。」

「然ればよ、お房ツ子は知んねえが、野郎が方さ血眼で付き絡ふと云ふだ、床の間に活けようなら、金屏風の座敷で視められる綺麗な枝でも、掃だめに捨てゝ置きや、蛆や蠅も一所だアさ。どのやうに嫌うても、他にかまひ人がねえ事なら、終には口説き倒されべい。」

と次第に聲低く、やがて口を嚙んだが、掛茶屋の前である。

「そりや掃溜ぢや。」

「鼻を撮むべい。」

「然うはせねことんし、罪になるだ、」

とこそノ、件の松の根に近う、店頭を向うに避けて、通りがかりに、多十娑婆氣で捨世辭をいふ。

「今晚は。」

「や、黙らつせえ。」と傍から制したが、はやくも娘の耳に入

つた。

お房は中形の浴衣に、なえた黒繻子と唐縮緬の腹合せの帯、前垂の淺黄の紐、これだけ新しいのを低くめてすなほな艶のある黒髪を、繕はぬ銀杏返し、燈火を少し離れて、道を行くものに目に背いて、くの字に端近く床几に掛けたが、黄楊の櫛も人柄で、茶店の姐さんと言はうより、少き女房が浮身を襲した水仕奉公の趣あり。紅と青とに繼ぎ足した、交りの禪を上から釣して、土間にくるりと轉がつた、眞白な小犬の、天窓で土を捏ねてじやれる手を、内向いて、あやして居たが、多十の聲に半身で此方に向き、「お掛けやすいな。」と柔に優しくいつた。多十思はず小鼻の皺を弛くのばし、ニヤリとして、「はあ、休めといふだけかね。」「お休みなさいましな。」「そんりや、休めだ、やあ、三吉。」「行くべい、行くべい、」と三吉すねたやうな身振りなり。「待ちなさら、まあ、可えといふに。」「多十は低聲の届くやうに、伸上つてお房を見た。

九

「姉、己はあ、何もお前さ、慙うといつて、別の仔細もねえだ

けんど、世間體があるでや、連の者も店さ休むことは厭だちうげに、今度来て寄りますすべい。」

面と向つて恚るかけかまひのない差合を、お房は豫て覺悟をするまでに、斷念めて居るのであつた。

「次に来ておくれやすえ。」と寂しい顔で莞爾する。

薄の中の女郎花、曲らぬ姿の捨て難さ。多十其のまゝには立去り兼ねたか、三吉に袂を引かれながら、踏留まつて、眞向に手を擴げた奴唄。

「なう姉え、茶一ツくれさつせえ、舌を濡らして行きますすべい。やあ、お造作だが、此處へ持つて来てくんなさる。」

「あい、」と靜に襷を差置き、小犬がちよつかいに出した小さな前足を、上から手鞠を突くやうに押へたが、土瓶から波々と、松の根際へ出前の番茶。些と大ぶりな茶碗に注いで、盆に乗せ、帯に挟んだ手拭の端を、まさぐりながら、藁草履でしと／＼と、灯を離れると月影に、透通るまで色白な、孤の顔が照らされた。

「澤山おかはりをしなさいましょ。」としとやかに差出すのを、宙で大づかみに取らうとした、近頃の残暑のため、干破れたやうな多十の手が、茶腕に蔽被されると、殆ど同時に、

「えゝ、措けツちやあ、汚れるといふに。」と三吉が横ざまに拂つた掌、這つてお房の二の腕を礎と打つ。痛さに眉を顰めたが、盆は手を放れて、茶腕はパツタリ。

「あれ、」と留めようとした指尖を、其ゝお房は土に支いて蹲つた。

「よう、」と吃驚、多十は斜違に飛退つて、松の枝に片手をかけ、足にかぶさつた茶を、ひかゞみにぐいと摺りつけて、

「はッ魂消た、何をする。」

「私等、我等はア御國さのために兵隊になるだアぞ。こんなものを飲むと汚れるだ。」

づいと立はだかつて力んだが、月に隈なく、明かに三ツに破れた、茶碗を見ると、三吉も逡巡。

袂を口に立ちも上らず、ものも言はず、お房の涙ぐんだいぢらしさに、遺瀨がなく大悄氣で、

「フム、」といったたまゝ茫然と立つたが、四邊を見廻し、じり／＼遁足、

「お城のお化ぢや、そりや出た！」と呼はりさま、身を翻して街道の方へ、ばた／＼と駆け出す後から、

「三吉やい、主ア、主ア。」

多十も續いて一目散。

彼方からも此方からも、ちよろ／＼と二匹三匹、慰め顔な月の影、綺麗な斑あり、白あり、黒あり、尾を掉つて、くう／＼／＼。

膝に両手をかけた一頭を、お房は袖でしっかり抱く。

爾時二人が見えなくなつた、堂から正面の路の中へ、衝と立出でた仇姿。こゝに人ありと見たらしく、聲音軽くつか／＼と間近

く寄つた。根上りの鬪鬪小形に品よく、白襟で、質素な越後上布、唐繻子の黒の丸帯で、裾短にきりゝとして、灰汁も色氣も抜けた

る風采、眉を拂つて鐵漿を含んだ、瞼の腫ぼつたい、目の涼しい、鼻筋の通つた、丸顔ながら引締つて何處にか品のある中肉中背、

古風の顔の造であるから、年紀のほど定ならず。急いで来て立留まると、ふと風が止んだので、水色縮緬の扱帯の下に、ぐつとさ

し込んだ、女扇を、覺悟の懐剣抜かうとする時、人の氣勢に身を

起したお房と顔を合せたのである。

十

草葉に繁く袖に沁く、目に一杯の露ながら、お房は懐しげに摺寄つて、

「おかみさん。」

「おゝ、お房さん。」

「まあ、おゆつくりやしたなア、」と待ちかまへて居た様子である。

「町は賑だね、まるでお祭のやうな騒だもんだから、つい小兒見たやうに、ぶら／＼彼處此處見て歩行いて、田舎ものぢやないか。あゝ、其で遅くなつたんです。大層待たせたね。何ね、こんなに長く成るなら歸りには寄らない分に言つて行けば可かつたと思つたよ。」

「どれほど遅うても可う來ておくれやしたこと。」

「よく、未だ店をして居たねえ、而して待遠くつて、戸外へ出て居たのかい。」

悄然した風情を見て、直にソレと、破れた茶腕に目を着けて、

「まあ、お前涙ぐんで。又何か言はれたんでせう。然うだら

う。」

と頷く如く、

「今来ようとすると、突然に二人、村の者が此方から飛んで来て、打突りさうにして駈出して行ったもの。何だね、いつもいふ通り、亭主にしようとも、兄にしようとも思はない者に、何をいはれたつて構ふことはないぢやないか、お房さん。」

強くいつたが、

「しかし亂暴をされちや打棄つて置かれぬ。其の茶碗は何うしたの、こんな處まで持出して、松の樹で缺いたんですか。」

「あの若い衆が通りやしてな、今晚は、と聲を掛けなはつたら、休んでおいでやすというたらなア。」

「然うすると、」

「傍へ行って腰をかけたら身體が汚れる因つて、茶を此處へくれ、言やはるで、持つて出ると、一人の方が取つて吞まうしやはつた處を、汚れる言つて、もう一人が、私の手を叩きやしたで、」と、ぢつと堪へて涙をばら／＼。

女房黙つて聞いて居たが、瞳を寄せて街道の方を視め、

「お房さん、まあ入つて掛けようぢやないか、種々話もある。」

えゝ、お前、そんなものは打棄つてお置き。」

「でも、こなひだ、おかみはんが買つておくれやして、五ツ揃うて居るのやし。」

「可いよ、打棄つてお置きよ。あゝ、よツとしよ。ほゝほ、もう年を取ると、一々此の掛聲だよ、厭だねえ、」

尋常に腰をかけ、女房襟を寛げながら、

「おゝ、涼しい、何時もお前ん許は寒いくらゐだよ、もう蟲が鳴くだらう。」

「鈴蟲が鳴きますぜ。」

「可いことね。あら、御覽、またお友達が殖えたぢやないか。

まあ、ころ／＼やつて、白や、
くうと鳴く。」

「そんなに巫山戯ると踏まれるよ。可愛いねえ、幾つ居るの。」

「五ツになりましたわな。」

「いそ／＼膝をついて鐵瓶の下を覗く。」

「お房さんお構ひでない。然う、五ツなんて居たのかね、それぢや一ツ茶碗が破れたつて何でもないよ。」

女房は帯の間から、御殿持の煙草入、思ふ處あるらしく、目を瞑つて、稍仰向き、胸の邊で、手さぐりに筒を外す、床几にかけた毛氈も、煙管の銀に花やかである。

其處へ差寄せた煙草盆で、無言で點けると手許に引き、持返して軽く一ツ、トンと火皿の灰を落す、廂をはら／＼と露の音。

女房は差覗いて、松の梢に颯々として、流るゝ如き銀河を見た。
「秋ぢやないかね。」

松毬

十一

日暮
陰風
吹鐵衣

「お房さん。」

「嗟ぞおかみはん、お草臥れ、此方へお上りやしてお休みやすな、」とお房は古毛氈の端を引る。

女房は心閑に一服を味ひながら、松風に耳を傾けると、吟詩の聲が近いて、

虞中 白骨 行 應朽

樓上 孤紅粧尚思歸

「お聞き、誰か来るやうだね。」

「良いお月夜だす因つて、書生さんが、ぶら／＼歩かしやはるのだつせ、今に來やはりますやる、おかみはん、あんな唄お好きだすの？」

「何ね、好きも嫌もないけれど・・・」

いひかけて打案じ、

「お房さん、書生さんでも何でも可い、此處を通つたら聲をおかけよ。何時ものやうに寄らないでも大事はない、一體どんな事をいふんだか、私が一ツ隠れて居て聞いて見るから、」

「お止しやす、お聞やしたらお氣に障りますせ。私もう何も思やしませんもの。」

「まあ、お前おかまひでない。否ね、何うせ分る事だけれど、わざ／＼路傍へ呼出して、盆ごと打敲いて茶腕を壊すなんて、憎いことをされち私黙つて居られない、あのね、一寸、」

「何え、」

「其處の戸は明いて居るかい、」と目で知らして、うつむいて吸殻を軽く拂いた。

葦簾の横に附着いて、譬へば古びた繪馬堂の如き、此の掛茶屋

の母屋がある、月下に暗く戸を鎖して、店の燈は其處まで届かず、喪服で包んだ家の如きは、長く煩らつたお房の母、世を去つて幾時まへも経ないのであつた。

煙草入れを早く了しまひ、すつと立ち、

「お房さん團扇を一本、蚊が居ようね、あゝ可よし、扇あひらがありました。」と靜に胸をおさへて云つた。

「蚤が居まつせいな、おかみさん、私の事なら打棄つて置いておくれやす、お氣の毒でなりやせんえ。」

「可いいよ、そしてね、何かいつたら、構はず言ひかへしてお遣り、背後に母さんが附ついて居ると思つて、氣丈夫に、分わかつたかい。」

「再ふたび耳を傾けたが、

「来るよ、」と云つて、薄の蔭、白い穗ほにならんだ人の、黒髪も顔も隠れる。

間もなく日和下駄を踏んで来る音、露にしつとりとした地に、近々と早ちかく此處へ。

お房は柱の竹に片手をかけ、袖を取つて、姿を半ば露して、便りなげに待つて居た。松の下行く男の影。

それと見て内端に呼ぶ。

「お掛けやす、お掛けやすいな。」

其の人首を低れ腕を拱こまねき、茲に茶屋ありと知らずに居たらう、呼ばれてはじめて心付いた趣で、立停まると、振り返り、左右を見て、つか／＼と歩を轉じ、燈を慕つて来ようとする、路の中で前のめれり、

「や、」と手を擴げて、ぞつと見て、咳く如く語るが如く、
「犬の兒だ、犬の兒だ。」

「休んでおいでやす。」

「涼しいな、」

と云ひながら、麥藁帽を脱いで持ち、猶豫ふ色なくづつと入つた。

休むと汚れるとさへいふ店に、近頃異數な學生客、濃い飛白に扱き帯して、素足に日和下駄。色の淺黒い鼻筋の通つた、眉の濃い、品の可い、脊のすらりと高いのが、眼に星の光あり。

十二

客は床几の眞只中、正面に遮るものない稲田の空に、仄なる石垣の名残を望んで、

「彼處に見えるのは、あれは若松の城だらうか。」と秀でた眉を顰めたが、穏ならぬ色があつた。お房は何の氣もつかず、

「はあ、お城だすえ。」

「然うか、」

とばかり黙つて了ふ。

「あの、お茶一ツおあがりやす。」

「
…
」
繼穂なさうに

「もしな、」と云つて、捧げ出した澁茶一碗、又たゞき落されようか、弾飛されでもしようかと、さつきの今で、お房はおどろ。

それでも返事をしなかつた。客は目が覺めたやうに、顔を上げて、まともに見たので面を背ける、お房の袖にも小犬の背にも、はら／＼と松の影、流るゝばかりの露を留めず、簀の子の天井を洩る月は、濡れ色の艶やかな女の髪に染むのである。

客はあはれにしをらしく、はじめて知つて茶腕を受けたが、口はつけず 差置いて、

「酒はあるかね、姉さん。」

「は、御酒ですか。」

「むゝ、酒だ。」

お房は取附の棚に五六本、貼紙は正宗とした壺が、マツチの箱と並んだのを指して、

「彼で可うすならお飲りやす、おしうおすか何うだすやる、」
たよりなさうに云ふのであつた。

棚を見込むと田の風の吹通しで、埃は溜つても居ないらしいが、松の葉越しの月が射すだけ、日の経つたのは知れるのであつた。

「可からう、早速一杯。何、姉さん、

猪口が見當らなけりや茶腕で構はん、出しておくれ、澁けりや冷で遣つけよう、飲口が宜かつたら爛をして頂くとする、どれ。

むゝ、結構に行ける、面倒だが突込んで貰はうか、其ね、口についた封じ紙をよく剥してくれ給へ、然うだ、湯氣で、べろりと糊

がはがれると、難儀だからな。」

「何うだすえ、熱いのが可うおすか。」と壘をつけた鐵瓶の肌を、やさしい手で兩方から壓へる一仕種へし

ぐさ》を見て、馴れないのを知つたか、氣の毒さうに、

「いや、可い時分に僕が出さう、手を伸せば譯なしだ、可し、可し。」

お房は優しい目のふちに皺を寄せて、眩らしく客を見上げ、

「ようしておくれやす、私不束だすな、お氣の毒や、」

「いや、宜しい、扨恠う段取りが出来た處で、何か肴はあるまいか。」

「何も旨いものはおざいやせんけれど、鶏卵の湯煎にしたの、

何うだすやる、」

「茹鶏卵か。」

「然うだつせ、地鶏卵で新しいのだすえ。」

「妙々、其を五ツ六ツ、出しておくれ、鹽はあるか、占たな。」

盆を手許に引寄せた、客は足を擧げて床几に落着き、壘を取

つて自ら注ぐと、下にも置かず、ぐつと干した。

「上出来、而して又なか／＼名酒だ。姉さん、最う店を仕舞ふ處だつたらうに飛んだ邪魔をした。」

「何うせな、寐やしても寂しいのです、何時までもお休みやしておくれやすな。」

十三 客は旨さうに舌打して、

「難有い、不思議な處でありついた、こんな處で飲まうとは思はなかつた。姉さん、僕はね、土地のものぢやない、今も町を通つて来たんだが、大分賑で一才一口遣るやうな家は、二階の欄干も物干も溢れるほどの景氣だらう。中にや、三味線太鼓の音のするのがある、旅鳥が一羽ぢや些と氣が怯けて入られない。入つた處で、氣がさして駄目だし、一他國へたこく》の者とても旅籠へ歸つて此の月に兩戸を閉めて飲んでも不味し、路々大鬱ざだつたのに、よく、まあ、こんな人通のない閑静な處で飲ませてくれる。大に謝すね、然も酒が可い、かはりをつけておくれ。」

倒に雫を切つた、見事に一本。

餘り大量ではないと見えて、もう顔の色も、ものいふ調子も變つたのである。

お房も嬉しさうにいそ／＼しながら、

「お世辭だせうけれど喜んでおくれやして、私もな」

「何、君も悪い心持はしないといふのか。」

「お嬉しうおつせいなア。」

ハグと膝を打つて、

「厚意謝するに言なし。むゝ、いや、此の鶏卵も又至極結構だ。」

「もつと、お食りなはるものがあると可いのやけど、あの、何うだすいな、夏大根の刻んで漬けたのがおざいやつせ。」

「大阪漬だな、貰はう、貰はうとも、お誂だ、」と大に乘る。

「そんならな、もし一寸行つて取つて參じます、待つておくれやす。」

「いや、御足勞には及ばない、其處にあるンならばだが、取りに行く、だつてお前、」

「直、其の母屋だつせ、わけありやしやせん。」

と前垂の端を取つて、お房は薄の前を通つた、あとから小犬がちよろ／＼とついて行く。

「待て、待て、一人ぢや寂しいや、こら白。」と云ひかけたが、どちらも忽ち見えなくなると、松葉が。ハラ／＼と溢れて落ちる。渠はぶる／＼と身震ひして、上げ胡坐の脚を土間に揃へ、胸を反して眉を顰めて、鶴の城の綱として、月に百年の歴史を描けるを見るや、心迫ることあるかの如く、ばた／＼と忙しい足踏。

其處へ草履の音すた／＼、

「遅かつだすやろなあ。」

「これは憚り。丁ど二度目のお爛もついた、姉さん、其處が母屋なのか。」

「然うだす、犬小屋だつせ、」とあきらめたやうに慾も望も忘れた風采。

「暗いぢやないか、誰も人は居らんのかね。」

「え、」

「父様や、母様は。」

「おかあさんは先達で亡くなりやしした、お父さん私知らんのだす。」

「ぢや、御亭主？」

「厭だつせ、」と身を細く、兩の袂をぐいと絞る。怪訝な顔して、

「それでは一人か。」

「はあ、一人だす。」

「夜も、」

「何時やかて、一人だつせいな、ほゝゝ、」

客は又仰いで飲み、

「笑ひ事ぢやない、こんな處に年中一人で居て何うする。」と

目を輝かして云つたが、何を思ひ出したか、今更果敢ない店の彼

方此方をニして、突然聲を上げて、

「ラムネの壘が！ 冷してあるな。」

十四 「姉さん、飲むよ、大いに飲むが構はんか。」と猪口を持
つた手を腕まくりで、客は目をニつていつた。

お房はたゞおとなしく、

「ラムネ食るのだすかいな。」

「はゝあ、ラムネ、いや、ラムネを飲まうといふ理窟ぢやない。

些と外に仔細のある事だ、此の仔細といふのが、又なかゝ不
思

議に面白い、何うだ話して聞せようかね。」

「聞かしておくれやすな、私ほんとに寂しいのです。」と客の

床几を少し放れて、お房は前垂に袂を折りかさねて小犬のつむり

壓へながら、前髪のふツくりした、瓜核顔をなつかしさうに振仰

く。

「寂しいか。あゝ、寂しからう、ラムネの話も寂しいや。」と何を思出したか。がツくりとうなじを垂れた。

「何だすえ、ラムネはんツて人さんのお名だすの。」

「人の名か。」

「聲を沈めて胸で笑ひ、

「人の名だ。時に姉さんの名は何といふね。」

「私の、…。」

「うむ。」

「ほゝほ、私名なんかないのだツせえな、田舎ものだす。」

これを聞くと目を瞑つて、

「ラムネも同一やうなことを云つたつけ。都をば露とともにいでしかど、秋風ぞ吹く白河の關。富士も淺間も鄙の名所だ。私は松島でございます、手前那須野が原でございますと、自分から名告らないでも、知つてるものは知つて居る。なあ、姉さん、僕が一つお前の名を當てて見ようか。」

「當ててお見やす、それだすがなア、あなた此處に小犬が居りますよつて、白やなんか言やはつては厭だつせ。」

「警句一番したね、こりや愉快、」

と會心の笑を漏したが、唇を切るが如く、杯を衝と横に引いたり。

「心配するな、ラムネは人の名といつたけれど、出まかせに白とはいはん、謹んで中てよう。」

「そしたら私も、あなたのお名をあてまつせ。」

「面白いな、しかし野郎の名は難しい、難しいといへば女の名だつて一度であてるのは容易でない、何うだ、旨くあたつたらお

前、僕の女房になるか。」

「え、其の代りにあなたを中てやしたら、旦那はんになつておくれやす。」

「可し、僕の名も亦酒から思ひついて、糟なぞは不可いよ。」

「滅相な何のまあ。」

「それでは中てよう、」とちつと又お房の顔を噴めたのである。

はツと報らめて打背け、

「堪忍しておくれやす。」

つくぐと打守り、

「益々肖て居る。」

「ラムネはんにだすかいな。」と思ひ切つて云つたるやうに、

お房は遺瀨なく俯向いた。

「何うだ、お前の名はお房、」

「は、」

「お房さんといやしないか、」

「……」

「然うだらう。違つたか。厭なものを無理に女房にしようとは

云はないから、中つたら中つたといひ給へ、何うだ。」

「まあ、」とうつかり顔を上げ、女は驚いたやうに胸を反して、

下についた手に力を入れると、小犬は袖の下でクツと鳴いた。

「中つたか。」

「何うして御存じだす。」と目を圓くした驚き顔、うつとりと

なるばかり、いはむ方なき、艶麗さ。

愕然とした趣で、思はず猪口にかけた手が震へた。

口の裡で、

「こりや足許が海にならうも知れない。」

十五 「今度は、姉さん、何、お房さんが中てるんだ。さあ、」

お房はつい居て、衣紋を直し、更まつた形になり、

「それでは言ひまつせ、一時待つておくれやす、」と、土間を探ぐると、五ツ六ツ、又三ツ四ツ、其處にも二ツ彼處にも一ツ、自然に零れたか、取溜めたか、松毬の數ある中から、お房は一ツ拾ひ取つて、撮んで耳を寄せて、月ある方に、雪のやうな顔を傾けて、ぢつと聞く思入をして無言。

「や、」

と叫んだ、けたゝましい客の聲に、お房は振り向き、

「何だすいな、」

「そりや何だ、何だね、其は、」

耳のあたりに捧げ持つて、

「これですか。」

「榮螺の殻ぢやあるまいな、」

いふことの餘に唐突であつたのに、客も自分で氣がついたか、
「然うだ。山の中の國だつて、」と殆ど無意識に呟いたのであつた。

お房は串戯と聞いて取り、

「榮螺ツて貝の事ですか。」

「貝だ、貝だ、相模の海の名物だが、其の松毬を何うする、未だ焚火をするには早からう。」

「此な、犬の子が皆嬉しがつて手玉を取ります因つて、拾うて置いとくのだつせいな。」

「だつて、耳に當てゝ何か聞くやうな事をするではないか。」
「あのな、此の邊は、森として居ます因つて、夏でも颯々と松の風が吹きますのが、心に染み込んで居るはけに、此な松毬を恚うしてな、」

お房は眞顔で打傾き、

「耳につけてぢいツとして居ますとな、松風が聞えまつせ。其にな、もし、夜さりなんぞ寂しうてなりません時、一心にな、これを耳にあてて居りますと、亡はりやしたお母さんの聲がして、遠くの方の、百里も千里もある處から、あの、何かいつてくれやはるやうな氣がしまつせいな、」

ほろりとして聲を曇らし、

「それやはけ、今な、あなたの、名を聞いて見ませうと思ひまして。」

然も思入つた状して、頷き、

「然うか、いや。そりや聞えよう。去年海端では榮螺の殻を耳にあてて、浪の音が聞えるといつた人があつた。成ほど、松毬には風の音が響くだらう。どれ、僕にも一ツ貸し給へ、」と床几を放れて、ずり落ちるやうに土間へ片膝。

「あれおめしものがよこれやす、」と帯に挟んだのを、引出して拂ふとて、はらりと開く朝顔染。

「構やせんよ、」と退けようとして、端と端を、心々に、故とならず放しもせず。

娘ははなじろみて月の隔てに袖屏風して左の耳。男は別なるを手探りに露の小笠の草枕、右の耳にあてて目を瞑ると、身動きに酔が出て、澗と全身の血が湧いた。動悸激しく胸を打つて、漂ふ船に乗る思、稲葉の白く風に動くを、打寄する月の浪かと覺えて、

あはれ玉の緒もゆるぐかと、心ゆくばかり恍惚する、耳許に娘の聲、松毬の中に響いて、

「新三郎さん、」と確に其の人。

我に返ると、目の前にお房が微笑み、

「あたりましたゞすやるな。」

「え！」

「新三郎さんといやるお名で、あの松坂さん、屹とだつせいな

あ。

「松坂新三郎——客は衝と立上つた。」

十六

又三平と床几に腰、はツとはずむ息繼に、註置の酒のさめたのを茶碗から雫も残さず。じりじりと膝を向けて、

「新三郎だ、いかにも松坂だが驚いたな。お前何うして知つて居た。不思議にも何も、殆ど言語道斷ぢやないか。」と詰寄らな
いばかりの剣幕。

お房は澄して、

「知つて居たのではないのだす、お約束の通あてたのだつせ。」

「姓名ともに。當る譯がないぢやないか。」

「貴客やかて私の名を丁とあててだつせ。」

理の當然に一言もなく口を噤んだ新三郎は、しばらくして苦笑。

「可い加減に調子を合せたのだらう、眞個の名が、お房さんと

云ふのぢやなくつても、其處はお世辭だ、はいといや其までとい

ふものさ。」

「あら、私嘘を、ほんたうに房だつせ、あなたこそ可い

加減なことおつしやるのやないのですか。」

「正銘いつはりなし、本當だから尚驚く。理窟は措いて、大抵

女の名は女なみに極つて居るが、男と來た日にや、權兵衛太郎兵

衛から藤原の朝臣鎌定まであるんだから、まぐれあたりにも當ら

うやうは無い筈だ。」と半ば獨言のやうにいつて、ととりとした

目で、くる／＼と四邊をニし、穩ならぬ面色で、

「まあ、可いや、何でもかまはないから、姉さん本當のことを

いつてくれ。一體何だ、僕は今何うして居る。と恚う膝に手を置

いて、床几に腰をかけて居るんだらう。」

「ほ／＼／＼、」

「串戯ぢやない、笑ひ事處かい、容易ならぬ次第だ。僕は死ん

でるのか生きてるのか。確に酒を飲んで居ると考へるが、まさか、

夢ぢやあるまいな。」

「まあ、あんた、何うしやはつたえ。」

「待て、今お前がものを言つたな、確に。それから、先刻お前

の名を當てた、あとで僕の名をすつかりいつたな、事實々々、正

に事實だが、こりや何處だ、岩代國若松だらう、福島縣會津郡。」

お房は素直に、

「はあ、」

「正に相模の國の社戸ぢやない、さら／＼鳴つてるが、風の

音か。」

「もう秋の風だつせ。」

「海ぢやあるまいな、背後は、」と捻向いて、葦簾越に差覗き、

「なるほど、土手が薄原で、うしろの畠は唐蜀か。」と又見直して視めたが、其處に人ありとは心付かず、葉がぐれに潜んだのは、母屋にかくれて耳を欝てゝも、板戸が隔たるので飽足らず、密に忍び出でゝ身を寄せた。お房が女房さんと呼ぶ女。薄に縋つて露も溢さず、静り返つて居るのである。

「其處でと、」

かんが考へ、

「此の先に川がある、何といふ。」

「湯川といふのだす。」

「湯川、可し、果して田越の川に不非。」

調子をかへて、

「橋があつたな、」

「涙橋のことですか。」

「涙橋か、些と氣になるが、しかし、これも湘南の景ではない、奥の御堂も社戸の明神ではないだらう。果して此處を會津として、これが夢でも現でもないとする、さあ、逾解らない、不思議も亦極まるぞ。」

「何だすえ、相模だの社戸だのといやはして、あゝ、何だすな、其の先刻のラムネはんの事ですか。」

「全く其のラムネだ、乃至又榮螺の事です。」

新三郎は少しく落着いた様子である。

榮螺の殻

十七

「聞給へ、月こそ違ふけれども去年の今日だ。相州葉山の海濱、社戸の濱といふ處で、丁度此の店と同一やうな葦簾張に休んだ事がある。ラムネも榮螺も其の店にあつたんだ。だがね、其處等のは、休茶屋といふのぢやない、衣類を脱いで潮浴に海に入る、海水浴の先づ支度小屋といったものだ。」

白砂の美しい波打際に八九軒、たゞ、葦簾で間を仕切つたのが一列に並んだが、七月も未だはじめつ方、殊に其の年は雨勝で、塵の都を遁るゝほどの陽氣ではなかつたので、下櫻山、逗子の海、鳴鶴ヶ濱、養神亭、日影の茶屋から葉山をかけて、避暑の客も數ふるはかり。女波に男波抜手を切るのは、別荘方の坊ちやんより、土地の小兒が多い位。況して通がかりに衣類を脱いで、貸手拭に猿股で、さつと一浴の如きは皆無なので、數多い其の葦簾張に、客を呼ぶものの姿もなかつた。

中に一棟、左右から、四ツづゝ數へて眞中あたりの葦簾の蔭に、夕陽の春く沖を視めて、葉山に月は白いけれども、軒に夕顔の花もなく、黄昏の風情あはれに、女一人、悄然一人で居るのを見て、新三郎は、其の時、近きあたりの知る人の別荘に逗留中、晩餐の小鱒鮮しく、猪口を過した酔心地、もてなされに事が足つて、早附木などは忘れて出たので、月の出汐の波の色、此處で一服と思ふ煙草の火も欲しければ、喉も渴いた折であつた。

「直ぐにラムネをいふと、其の娘がかぶりを振つて、これはお止しなさいまし、今まで一杯に西日がさして、此の小桶の水は湯

のやうでございました。冷して置きます中のラムネなどは、沸いたりさめたりしたのですからお身體に障りませう。店を出します時、村の衆が貼片がはりだといつて祝てくれましたから、砂地に出して置きますが、賣物ではない、といつて、何の通りがかりのまぐれ客。際物でお鳥目さへ取つて了へは、あとで行倒れになつたつて構はないものを、殊に又盛場の人氣の悪い中で、深切に茶を沸してくれる。其もね、砂の上へぢか置で、七輪があるばかり。螢火ほど残つた中へ、消炭を拾ひ込んで、腰の折れた團扇は、前に使へと出したあとだから、かけがひの無い蒲鉾小屋、姉さんは浴衣の袖で煽いだではないか。

早く飲ましてくれる氣で、然うやつて氣はあせつても、心は落着いた女と見えて、僕が煙草を飲まうとすると、杉箸の尖の燻つたので、燻を挟んで出したんだが、固より火鉢なんぞ無いのだから、其處でそら先刻から、大層評判になつた其の榮螺だ。」

新三郎は飲込ませるやうに笑を含み、

「ね、又何につかふのか知れないけれど、此處に松毬のあるやうに、其處ぢや榮螺の殻澤山。やがて緑の苔が生えて、紅蟹が棲みさうな、竹の柱の土臺にしたのが、怪しからずごツノして慙う昨夕あたりは潮が来てかぶつたかと思ふくらゐ、尖々に露を含んで、涼しくかさなり合つて居たんだね、其の中から一ツ取つて、娘が今の燻を入れて、床几の上へ寄越してくれた。唯恥しさうに見えたつけが、何の極りの悪いことがあるものか。

玉を敷いたやうな美しい白濱を、葦簾越。葉山の月が、音のするやうに眞丸く間近に出た。波はあつても夕風。空。風は唯、片

一方の社戸明神の眞暗な松からばかり吹いて来るやうな、何ともいはれない心持の好い時だ。榮螺の殻の煙草盆は、人の別荘に客で居て、綺麗に灰ならしをかけた、落雁に紅をつけた體の火入から、密と吸ひつけて、おかはりといふ手附をしつゝ、灰吹の蓋をあげながら、紅革の厚蒲團、結構ぢやあるけれども、眞四角に坐り込んで、えへんなんと、咳を咽喉へ引込ませるとは雲泥の相違。あゝ、雨露さへ凌げたら、此處で世帯をしても一生は暮される――姉さん、酔つばらつて云ふのぢやないが、仔細がなければ、僕は養子にでもなる氣になつた。」と満を引くこと如例。

十八

「するとね、土瓶の下を働いて居る女は、房々とある髪を、繕はない櫛巻で、海邊の女だから、お前さんのやうに色は白くなかつたが、襟許もすつきり。些大柄だが、仇氣ない、うまれつきを其まゝ野育ちとは見たが、實にしをらしい、引かけ帯がずり下つて、背中の伸びたのもすら／＼と姿よく、褪せた淺黄の下じめが美しかつた。

はい、お茶が入りました、と茶腕になみ／＼と注いでくれたが、

いづれ海水浴の連中が、赤裸で出入つて、手盛でがぶ／＼遣ると見える、まづあの湯屋の上り場といったやうな店だから、茶盆に及ばず、砂地へ蹲んだなり手で寄越す容子なんざ、十年連添つた女房ぐらゐ、微塵も色氣がない中に、口ぢやいはれない風情があった。譬へて言や、紋着羽織で畏つて、床の間の牡丹を拝見するのと、山路に行暮れて、薄と一所に寐るやうなもんだらう。

お手盆で換へて頂く、番茶の其の旨い事。

出花なり、酔覺なり、飲むほどに干すほどにだ。やがて土瓶が軽く成る、澤山御馳走をあがりましたねと、古風な氣取氣のない處が、柔く深切に聞えたので、又今更染々と顔を見ると、眉の凜々しい、鼻筋の通つた、目の涼しい、但瞼の肉が落ちて、うるみがあつて冴えないが、下ぶくれで瘦せても居ない、目に立つのは唇の、宛然紅をさしたやうな、活々として居た事で、もし其の色が沈んで居たら、恐らく、髪をおろさない尼法師とも見えたらしい、寂しい女、それだけに尚何となくあはれで、こんな者でも力に成つてやりたい氣がした。

しかし効々しい働振、水をささうとして、腕まくりで柄杓を取つたが、桶に汲込んであるのを、土瓶うつす時、眞白に澄んだのに、きら／＼月がさすから、これは、海邊には珍しい、好ささうな水だ、といふと、亡つた親仁はこればかりが自慢でございました。唯今では餘所のお別荘のお庭の井戸になつて居りますけれども、擔で頂きに参りますと、先に居たものならば、とおつしやつて、汲まして下さいますと、何心なく云つたやうだけれども、聞くものの身に取つちや、いかにも氣の毒に考へられて、酷く身に

染みたもんだから、然うか、といった切、何を思ふといふ事も無しに、黙つて了ふと、女が繼穂がなかつたと見えて、其時だ。

又一ツ榮螺を拾つて、今度は菓子盆にでも使ふ氣か、微塵棒一ツ見當らないが、と思つたが、然うぢやない。

姉さん、先刻、お前が行つたやうに、其の榮螺を耳にあてて、ぢつと遠くのを聞くやうに、恍惚して、やゝしばらく　だから、不思議に思つて尋ねたんだね。

然うすると、はじめは浪の音がすると云つた。氣を静めて、何にも餘所の事を氣にかけないで、一心に耳に當てゝ居ると、底の方に、何ともいはれない好い音が響いて、千萬無量の、しかし騒がしくない、寂しい美しい聲が籠つて、龍宮の御殿で、魚がひそ／＼話をして居るのが聞えるツて、本當に確と信じて居るらしい、嬰兒のやうな無邪氣な顔。

無邪氣な心は、濁がないので、まるで、神か佛かと思ふやうな、尊いものだから、唯、あはれな深切な、優しい女と見て居た目に、別に、譬へやうのない品のある處が見えて來て、些と行過ぎた考へぢやあるけれども、成程龍宮のひそ／＼話が、榮螺の貝から聞えるも道理。四邊の景色も景色なり、此の月が隠れたら、姿も一所に、海の靄で、消え失る、ものの精ぢやあるまいか、と思つたくらゐ。

其のくらゐなら、先方で承知をさへしてくれたら、せめて擔で汲むといふ、其の水桶をかついでなりと、一生を送る覺悟をして、二度と又例の落雁で煙草を飲むやうな、馬鹿なことをしなけりや

可いものを、

新三郎は足踏をして、我と我身をじれつたさう、

「其處が凡夫だ。」と肩を揺つた。

十九

「其榮螺を耳に當てた姿と、其の仔細を話した様子のしをらしさに、僕は自分を忘れてね、

更めて何かいはうとした。何か言はうとしたつて、更まつて些と變だがね、酔つちや居るし、人は居ず、濱邊にや、唯其の小屋に二人なんだから、まさか唐突にもいかなから、名を聞いた。何といふ名だつて其の女の名を聞いたんだ。」

新三郎は自分で當時の事をいふ如く、今も我を忘れて語つたが、急に我身に返つた風情で、目を二つて、ものを見るやうにして黙つた。

時に其處とも分かず、あたりの草の中に、あはれに床しく、露が結んだ鈴の絲が、葉に搦つて揺ぐかと、微妙な聲が幽に聞えた。

「やあ、松蟲が鳴いて居る。」

お房も我に返つた状で、思ありに其方を見返り、

「住い聲で鳴きまつせえなあ、あれ、お聞きやす、遠くでも聞

えますやろ、毎晩な、私唯一人して此を聞きましては、泣いたり笑つたりしまつせいな。今夜はあなたが来ておくれやして、おもしろいお話をしてくれやはる因つて、今まで氣も附かずに居ましたの、もつとお酒つけますせいな、遊んでおいでやして、あとを聞しておくれやす。歸りやはると、又蟲の聲ばかりだつせ、寂しうおすけにな。「と、便なげに打見た目に、涙含まぬばかりであつた。

頸を掉つて、

「いや、未だ其の他に松毬があるぢやないか。それ、おつかさんの聲が聞えるといふ。其に上を越したものはないではないか。」と酔つた人のいふとは聞えず、達觀の僧の、識、徳ともに秀でたるが、女人を悟すが如くに云つた。

お房も甘える状にいや／＼して、仇氣なく、
「否な、何にも思やしませんで。一心におつかさんの事思ふ時は然うだすけれど、さきへな、蟲の聲を聞きまして、あゝ寂しやと思うたら最後だつせ。どないしたつて、矢張蟲の聲ほか聞えやせんもの。」

新三郎は、やりちがへて兩の腕で胸を抱いて、
「不可ん、何故然う泣かせるやうな事をいふんだ、女の兒のいふことだな、涙ぐむのは、大日本帝國御先祖から御法度だ。」

呵々と高く笑ひ、眦を切つてしばたゝき、

「しかし道理だ。迷つた事よりほか聞えまい。先刻、お前がするやうに松毬を取つて耳にあてた時は、海と山こそ違ふけれど、相模と岩代と百里を隔てゝ、恚うも肖た事があるものかと思つた所為か、しばらくは夢を見たやう、酔つてるためもあらうけれど、足許もゆら／＼して松吹く風も波に聞えた。四邊が眞暗になつて、

自分の居まはりばかり月で明う、大なる光の輪で包まれた氣がする中に、向うむきの女の其の、淺黄の扱帯の色まで見えて、ぞつとする時、自分の名を呼ばれたので、はつと思ふと、振返つたのはお前の顔だつた。

それにつけても、榮螺の底に、龍宮の聲が聞えるといった、其の時の人に恥入るわけだ。いかにも心に迷さへ無かつたら、自分がしても貝の中に、波の底の響がしたらうものを、些と外に思つて居た事もあつたもんだから、其の方へ氣を取られて、直に其の葦簾張を出て了つたがね。

僕の耳に響いたのは、龍宮の聲ぢやなくつて、ヴァイオリンといふ西洋の樂の調だ。

直傍の、社戸明神の裏の、月の良い巖の上で、然るお嬢さんが弾いて居た。即ち僕が客に成つて居た、別荘の主人の娘にあたる。今度、此國へ見えた、姫様といふのも、場所は離れて居るが、同一相模の海の、鎌倉長谷といふ處の別荘から泊りがけに遊びに来て居た。別荘の、主人は、以前矢張會津の家來であつたんだね。

さあ、其のヴァイオリンの音に聞き惚れて、ふら／＼と葦簾張を出て了つたために、龍宮の聲は聞かずじまひ。」

「何うだ、姉さん、まあ、お前は何方が好いと思ふか。なまなか其の西洋の樂を奏でる人が、奇代の上手だっただけに、僕、當分、いや長いこと、丁度今月で満一年。」

正にヴァイオリンの音に迷つて居た。其がために又と得難い、龍宮の音信を聞かうとも思はなかつたが、あゝ。」

深く歎息して、松坂は床几に掛けたる其まゝ、居ずまひを正して打望む。路傍の松黒く、枝が亂れて、鶴ヶ城は霧の中に包まれて見えず、空の薄曇に雲が動いて、過去つた幻の路を辿りつゝ語る中、水の透過るばかり明瞭だつた四邊のものゝの色は、朦朧となつたのである。忍ぶには便可し、薄にさら／＼と氣勢があつたが、蟲の音は處を移さず、思ふに様子を伺ふものの、身じろぎをしたのであらう。

しばらくして、

「まるで夢を見るやうだ。」と、獨打棄つたやうにいつたが、氣をかへ、

「然ういふわけだ。榮螺もラムネも、これで皆分つたらう。其處でお前さんだが、度々いふやうだけれど、脊恰好、容子といひ、聲といひ、唯些と小造で、年紀が二ツばかり若いかと思ふだけ、店だつて又失敬だが、假小屋同然。まあ、こんなに肖たものがあるかといつた、房とい、ふのは、其時の娘の名だから。」

「まあ。」と息をひくやうにして、下から上へ袂をお手玉、細く忙しく動かしながら、

「本當だすかないな。」

「嘘かも知れんが、當つたとするんだ、それが、お前は又何うして僕の名を當てたらう。」

「そりやな。」

と直に應じたが伏目になり、帯の横を軽くたゝいて、

「あのな、松毬に聞いたのだつせ。」

「實際は。」

「然うするとな、お母さんが教へたのだす。」

「ぢや、先刻約束をしたつげが、其の母様に聞いて見たら、何と、お前は女房になれようか。」

「

「僕の女房だ、即ち松坂の細君だ。」と、新三郎は陶然として

大に酔つた、前のめりにふら／＼と頭を垂れて、確と両手で膝を壓へる。

「可うございますともね、私あお媒酌をいたしませうね。」

と、朗にいふと、松蟲の鳴く音を留め、薄を分けたのは以前の女。

お房より新三郎の驚き、振り向いて、酔眼をとろりと二ると、葦簾越なり、草の中だが、曇つた空に燈明く、目も眉も衣の色も、すらりと鮮麗な立姿。

「呀、清瀧の女房ぢやないか。」

清瀧は樓の名で、東山の温泉宿、松坂の旅館であつた。

「ほゝほゝ大芝居。松坂さん、今夜は妙な處で、此で二度お目にかゝりますね。」

悪権太

二十一

清瀧の女房軽く頷いて、あでやかに莞爾し、

「御免なさいよ。」とづつと出る。

途端に碯と身を伏せたは、猪が轉んだやうな、毛むくじやらの荒漢。

但其の身の軽い事、社の路の薄原から一談低い畠のへり、五側ばかり植込の、繁つた唐黍の畑の中へ、土に生えた奴の兩脚、根こそぎに薙ぎたるばかり、もろに膝を折敷いて、風より高き音は立てず。足を踏張り、尻を立て、握拳で泥を掴んで、身體にぴり／＼と筋を張つた、髪赤く蓬に伸びて、膚に鱗のあるばかり、窪める眼、偏き鼻、唇を剥き反した一一口や牡丹を吐かむとす。

腰切の古単衣に、繩の帯、脚絆ばきで、素跣足で、手拭を咽喉にわがねた、年紀二十有七八歳、獸ならば老人株、人間ならば血氣の壯者。莖を透して葉を通して、あからさまなる葭簣の中、ちぎれ／＼に亂れかゝつた青簾越に覘くが如く、燈の色に露の添ふのも、男女の姿に影のさすのも、あからさまに、つい間近。
h 清瀧の女房の、松坂には見せじと忍んだ、後姿も、此の方に是指を伸ばして届きさうな處だから、唐蜀黍の軸を小楯に爽に調子高な酔つた聲、女房、といふまで聞いて、眉毛の毛蟲打蠶き、蛇の舌閃いて、目の色の變つた折から、不意に清瀧の女房が、聲をかけて露れたので、見られぢやならぬと、土に匍つた。

傳へ聞く其の昔、肥後の御曹子爲朝に、獸の皮をひさいだる
山男に似た古今の怪物、人が、あらず、獸か、あらず、惟ふに是、
渡天の僧の法衣の袖に宿り来て、我が敷島の、山奇に、水の怪な
るあたりへ、撫子ならぬこぼれ種、律の中に生ひ出で、あはれ
民草の數には洩れず、親なく、妻なく、子なく、家なく、着物も
ない、が、籍を、岩代國會津郡若松なる野郎構の中に置き、身を
摩利支天尊の、御堂の縁の下に置いて、權太郎、渾名を岩越名代
の嶮、飯豊山の岩から岩、枝から枝を傳ふに發して、飯豊猿とい
ふ、あぶれもの、禽獸と、もに人も知つて、あたりへ寄りぬ獵夫
である。

即是、お房を魅入つた色男で、も、んがあと天窓から鹽をつけ
て噛るかはりに、やいの、といふ次第であるから、思ふべし。爰
に焦慮の心中。

其血湧き、肉動く、殺氣を籠めて、月が空に面を蔽ふと、銀河
を斜に一刷毛颯と、末濃に野末に廣くなつた、眞白き雲の其の端
から、ひらりと下立つたやうな、美しいものの姿が、同一畑中の、
唐蜀黍の繁の外へ。

水髪のとら／＼と、鬢輕きみだれ銀杏、簪の玉星に蒼く、露草
一輪折りかざして、夜目に夕顔のほの見ゆる、玉の顔、雪の膚、
羅を透く鶴の色、すらりと瘦せて、風采描ける天女に肖たり。

白絹の襟に朱鷺色の無地の長襦袢、秋の曙、茜淡く眠れる如き
薄鼠の縞に、白抜き秋の七草、絲薄の穂は柔く、ふつくりとあ
る胸をつゝんで、一本帯の垣根に亂れ、裳は婀娜たる女郎花、松
蟲の影を宿し、桔梗の花袖に開いて、月の移るかと露に濡れたり。

片手に輝く錦の小包。上前の片褙を、密と片手で取りながら、湯川の岸から素直に、畦に通つた一筋道、枝豆蒼く植ゑたる中を、社に志す人が、薄に蟲を聞く人が、葦簾越の灯に路を尋ねて寄る人が、静々と近いたが、これも松坂の高聲に、不圖歩を留めて、やがて些と足を早うした。

姿を見て、急いで、つか／＼と寄らうとする、目の前に大蝦蟆の、四つに這つた權太の形に、軽く退いて、敢て騒がず、右手の扇を颯と開くと、白地に墨繪の雁がねなり、半面に霧をかけて、見て、見直しにゐんだのは、秋山衣子、新三郎がお房に語つた、ヴァイオリンの名手といふのは、此の美人の事である。

怨恨

二十二

「私は何でございますよ、今日は嬰兒になりましたね、お城の姫様が十八で、はじめての御入國だといつて、大層賑な催がある」と聞きましたもんですから、町へ見物に出て参りましたのでござ

います、松坂さん、人込の中でも何でも潜つて、見世ものの赤い看板だつて見る覺悟だつたものですからね、行きがけに此のお房さん許へ、蝙蝠傘なんか預けましてね、大層な意氣込で出掛けましたけれど、まさか小兒衆ばかり立つて居る、辻の手品も覗いては居られませんか、あの大町名古屋の龜遊軒の射割を貴方。人立の中で見物をして、貴方のお手際を拝見したんでございます。

それから、貴方は、ぶん／＼何處かへ出て行らつしやるから、お後へつきまして、丁度可いお連だとは存じましたけれど、未だ昨今でございましてね、御縁があつてお宿を申しつかりましたばかり、そんなにお馴染でもございませぬのに、お呼かけ申すも如何かと存じましたし、餘り露骨で失禮ではございますけれど、ひよつとかして、旅の御鬱散に、廓へでもお出で遊ばすのぢやないか、もし然うだと御一所は御迷惑と存じましてね。ですが、私も別に何處へといつて當はありませず、最う其方此方、お房さんの許まで歸らうかと思ひまして、道順でございませぬですから、うかくお跟き申して参ります中に、貴女は傍見も遊ばさないで、段々寂しい方へお運びで、到頭お城の中へお入り遊ばすのが、廣い大手先で、遠くから見えるぢやありませんか。

ぢや、何、おともをしてお連になつても大事なと思つて、あとから参りますと、まあ纔の間でございましたのに、あの可恐い草の生え。夜分の事なり、お姿を見はぐりまして、一番高い處の、鹽蔵の穴のふちで、姫様と貴客と三人、妙な工合で、睨みツこで、又ばら／＼にお別れ申しましたが、まあ、何だつてまた、夜分、あんな處へおいでなすつたのでございますえ。」

清瀧の女房は唯一ツある狭い床几に、新三郎と膝を組違へに、静に煙草を燻らしながら、世馴れたものゝ言ひやうである。

最初媒酌をと唐突に云はれたのにこそ、酔つた上にも返答に支へたが、斯の問に對しては、新三郎は敢て猶豫ふには當らなかつた。

「いや、鶴の城の一件ですか、ありや驚いたです。實に弱つたのなんのツて、全く意外だつた。しかし一人で遣つて來たのは、女房さん、貴女は豪い。」

「はあ、私は土地の者で、よく様子を知つて居りますし、其に此の國ぢや、つい近ごろ、あんなに澤山忠義な方が、石になるまで、無念に凝つて討死をなすつた場所ですから、落ちて居ます瓦のかけらまでも、魂があるやうに言つておいでなさいませけれど、私は別にそんなに尊いとも恐いとも思ひません。」

「益々豪い。私なんざ土地ツ兒でもない癖に、非常に城の光景には恐入つた、唯一言もなく降参をして了解つたです。失望落膽、恐らく男兒兜を脱いで軍門に降つたくらゐ、腑甲斐ない、腰の抜けた、ぐうたらな、馬鹿々々しいことはないですな。で盛に飲みます、けれども敢て酔はんです。」

「お房さん、大分召上つたの。」

「四本ばかりですえ。」

「ざつと七合だね、それにしちや。何ですな、貴客、もつとお發しなさいまし。お房さん、お酌をおしな。何だつてあんなお城なんぞに降参をなすつたの。」

「あんな城！」

新三郎目を敬て、

「あんな城？　こりや怪しからん、僕をして降参せしめたほどの城を、何と、あんなとは怪しからん。」

「おや、大層御鼻屑を遊ばしますね。それぢや貴方は降参でなくツて、お城の方へ裏切をなさいましたか。それでは此のお房さんは、お嫁に上げられはしませんよ。」

二十三

「はてな、するとお前さん方は、城に怨でもある人かね。」

「松坂さん、怨のあるのは私で、お房さんは、お城に憎まれて居る方です、どつちも禁物なんでございます。」

不審な一言、

「何うしてですか。」

「両親とも殺されましたのでございますもの。」

「殺された？」

「はい、あの御維新の時、官軍が瀧澤峠を越しまして、皆様に龍城を遊ばす時でございます。私の両親とも、水の出花と申した

やうな、若い同士で、然も貴方、私がお腹に居りまして、母が臨
月でございしましたが、敵が亂入と申しますので、抜身を提げなが
ら父が母の手を引きまして、一先づ北邊へ落さうと出掛けますと
途中、ばら／＼お城へ駈込みます、藩の方に合ひますと、下郎
何處へ行くと聲をかけたものがあつたさうです。わけを話して、
しばらくお見免を願ひたいと、父が申しますのを、いや此の會津
藩には、敵を目の前に置いて、夫婦で道行をするものは無い筈だ、
卑怯！ といひさま貴方、抜討に斬つたさうでございます。

母が倒れましたのを、毎朝八百ものを賣りに参ります、野郎がま
への百姓が、此の騒ぎに荷を打棄つて負つて逃げてくれました。
私を其處で産みますと、それなり母はなくなりましたさうでござ
います、怨ぢやありませんか。足輕だつたと申します、二人扶
持や三人扶持で、生命まで差上げて可いものです。何ぞといふ
と忠義々々つて、鼠が聲がはりをしやしますまいし、お房さんの
母様は又、親御や姉さんが自殺をなすつた中に、死ぬのは厭だつ
て、泣いておいでなすつたもんだから、其の姉さんの姑にあたる、
朝ツから忠義々々といひつゞけて、武士ののだの、梓弓だのと、歌
なんぞ遣りました變な婆がね、おのれ、武士の道をわきまへぬか、
介錯をしてやらうと、長刀を持出した處へ、官軍方の長州のお土
が一人飛込んで参つて、是非は知らず、若い娘が、取亂してアレ
／＼いふのを、三途河の婆のやうな切髪が、長刀で追つかけるも
んですから、突然押へつけると、ちえッ！ 残念ですツさ。」

清瀧の女房は物語りながら、淺笑したが、薄く蒼く唇から
氣を吐いたは、含んだ煙草の殘の煙。

「何うでせう。ちえッ残念、子息の一生の心得違ひ、下賤の女を妻にしたれば、大事の場合に歌を詠めず、自殺もならず、介錯に隙取つて、死後れ、汚らはしや、敵のために手籠になるか、と大粒な涙を流したもんですから、其のお土が貴方ね。」

そんな中にも苦笑をして、血迷うたか、婆、手前幾歳になる、皺だらけの面を見る、いや、手籠にされるの、辱を蒙るのと、咽喉を突いたり、舌を噛んだり、第一己達がついて居る、官軍を馬鹿にした譯だ。時々兵糧にやさしつかへても、同一日本人ぢやないか、誰も女にかつ彘ちや居ない。可哀さうに、といった傍には、すなほな髪の毛の長いのを、疊に敷いて若い奥さんが、血塗になつて居ました。それは何です、此のね、お房さんの母さんの姉さんで、其の姉さんが片附いた後に、實家が死絶えたものですから、姉さんの縁附いたさきへ、世話になつて居たんださうですが、姑は大變な嫉妬やきで苛め抜いたツて話ですよ。

ですから、其時なんぞも、武士の妻はこんな時だ。さあ、死ね、やれ死ね、ツて懐剣を出して押つけて、え、腑甲斐ない、腰の抜けた、卑怯ぢや、死にやうを知らぬな、下司め、私が教へてやらうと、また婆さんの装束が大袈娑でさ。死におくれたのが残念なくらゐなら、さつさと舌でも噛めばいいのに、白無垢の三枚襲なんかで、嫁の膝を片膝でおさへつけ、たぶさを掴んで、仰向けにして、自分も抜いた九寸五分を、咽喉佛の處へ密とあてて、恚うせい、恚うせいツちや、五分、一寸づゝ、ぐいゝゝ、とせりあげて、目を白黒せながら、其の掴んだたぶさを揺るんですツさ。」

新三郎は目を三つて、

「あゝ、樓上紅粧尚思還、尤だ、死ねない！」

と幾度も頷いたのである。

二十四

「お房さんのお母さんが、目の前に姉が修羅道の責苦に逢ふのを見て、おどろしなから、留めようとして傍へ寄ると、其の懐剣を逆手に取つて、婆め、切尖を伸ばすから、寄るにや寄られず、縋らうとすりや、足を上げて、何かめ直した白羽二重の蹴出しなんぞ蹈開いて、威丈高になつて、さあ／＼云つちや、」
女房はぐつと仰向き、眞白な咽喉へきらりと、煙管の吸口が細かつた。

「自分で仕方をしちや、せり立てるもんですから、若い姉さんは、もう眞蒼になつて、目が眩んで、突伏した拍子に、婆の手が鬚を壓ると、雪の様な襟脚から、だら／＼と染んで、下の疊がどつと鮮血になつたさうです。」

「おかみはん、私もう。」

「お房さん恐かないよ。」

御覧なさい、ぢや、直ぐあとで
婆が自害をするかと思ふと、何うして、今度はお房さんのお母さ

んに、また何ですわ、忠義か何とかで、お國のためが何うとか、何が何とかだから自害をしろツて、遁げて歩行くのを長刀で追つかけた一件でせう。

それから何だつたさうですよ、其の長州のお土が、姑婆を蹴倒して置いて、女中、さあ一所に來な、何處か近在に知合があつたら、其處まで送つて行つてやらう、帯なんざ何うでも可い、髪も其まゝで、疾く、と出しなに鴨居にかけておいた槍を取つて連立つて、送り届けて下すつたのが矢張此さきの野郎がまへのお寺です。

後に其のお侍は、左の手に瘡を負ひまして、其時、官軍で假病院に使つて居りました、同一お寺へ見えましたがもんですから、お房さんのお母さんには、早く申すと命の親。

其處でこそ、命がけて看病をしてあげました。不思議な縁で、夫婦になつて、此のお娘が出來たんでございますがね。

婆さんは氣が違つて、戦争の濟んだあとを、方々、取亂して駈け歩行いちゃ、忠義々と口癖のやうに饒舌り廻つて、お城を拜んで大道で土下座をしたり、棒ちぎれを持つて橋の上で水車のやうに振廻す。其の中にも嫁姉妹の事を。いや、淫婦だの、毒婦だの、敵の間諜だの、裏切だの、と悪口雑言。

後で聞いて私なぞが考へますれば、若奥さんの思だらうと存じますけれど、人氣の立つた時分ですら、武家方、町人、百姓まで、氣が違ふほど忠義な婆さん、活きながら武士の道の精靈だなんて大騒ぎ。

此娘の父上でございますね、長州のお侍も、もう身體が不自由なり、長々の浪人で、國には妻子もない身だからと、若松

で世帯をお持ちなすつて、御夫婦で、其お狂人どのをねえ、まあ謂はば、姉さんの敵ぢやありませんか、それでも深切に引取つて、お世話をなすつたんださうですよ。

然うすると、例の大道へ出て、人立の中で、お城の方へ土下座をしたり、長刀の一手を御覧に入りたいのだから耐りません、跣足で駈け出して仕やうがないものですから、少し窮屈な思をさせると、じれ込んで、梁へぶら下つたぢやありませんか。

やあ、淫婦の、毒婦の、裏切の、間諜の、非望人夫婦して、忠義の精靈にぶらんこ往生を爲せたわツて、土下座と水車にヤンヤノ、囃し立てた連中が、まあ何うでせう、人でなし、畜生とまで言觸して、飯盛山、鶴の城の、お國の恥だなんて云ふでせう。

ぢや、其の人達が、それほどに大事がる婆さんなら、自分が世話をすりや可いけれど、暴れ廻る人間は銅像にも出来ませんし、いくら忠義の精靈だつて尿糞を垂れ散らしゃ汚いではありませんか。水一杯飲ませようもしない癖に、口に税は立たぬと思つて、可い加減にするが可いんです。

了局にや尾に鱭が添つたもんですから、談々に評判が傳はつて、未だ此の娘のお父さんが生きておいでの時分から、附合ふ者もなく、それこそ口を利くものはなかつたのでございますがーお房さん、今年で七年になりますね。」

「六年あとに父上さんが亡りましてから、男親がないと、さあ、馬鹿にして、それまでは、唯向うから口を利かず、外で逢や遠くで指をする、傍へ行きや、そつばうを向いて了ふくらみだつたのが、貴客、面と向つて、汚れるの何のと、云ふやうになりました。若い方や、學校へ出て、これから軍人にも成らう人などは、尚の事。お國のために命を捧げようといふ者があんな不屈の奴等、傍へでも寄つたら、そこから血が腐るなんて酷い事をいつて、其の癪何なんでしょう、今時の人で、委しい様子は知らず、唯汚れるとだけ聞いたのなぞは、悪い病の筋でもあるか、血統違ひの者でもあるやうに思つて居るのも澤山ございます。御覽なさい、先刻も先刻です、店の前をひやかして、入ると汚れるからツて、向の松の樹の下まで、塗盆で何うでせう、お茶を持ださせて置いて、たゞき落して茶碗を割つたぢやありませんか、此の娘ばかりぢやない、可哀相に犬の兒までが、うる／＼してさ、可憎しいツたらないんですよ。」

新三郎は深く思入つた風情で聞く。お房は顔に犇と袖。

女房は語を續け、

「あの人達に謂はせたら、私も矢張非望人の子でございます。

松坂さん、ですから、お城に怨があるぢやありませんか、お房さんはお城に憎まれて居るのぢやありませんか、ねえ。」

新三郎は胸に疊んで聞いて居たのを、一時に、

「いや、解つた、解りましたとも。無法極まる、凡て無理の絶頂といふお言だが、無理はない。」

如何にも僕には解つたです。不埒至極だ、そんなもんです。鶴の城に絶えない熾火は、忠魂の光だとばかり思ふと大に違ふ、露となつても消え失せない、怨の涙もあるんですな。お説の通り、兩便や食物の厄介がないと思つて、無暗に忠義倒しにして、人の命を、勝手に自分達の廣告にするんです、己が身の飾にするんです。竈を拝むものは、内の女房で、招猫を祭るものは賣女の徒だ。

嗚呼忠臣、楠氏墓、忠義は黙つて行ふべし、不斷饒舌るべきものではない、既に飯盛山の少年隊の如きも然うだ。えらいえらいと誉め倒しにして、何爲其の親に別れ、姉に別れた、心の中を汲でやらないだらう。もし一人でも、討死をするのを拒んだものがあつたら、人は必ず、卑怯と言ひ、未練と唱へ、烈しいのは逆賊といはう。何の、會津が亡びたつて、土も水も減るのぢやなし、日本の國が小さくもなるのぢやなし、唯、若い同士の初産の兒は、死んだあとでは見られぬではないか、なあ、おかみさん。

國に殉ぜし自殺なんかさせられた日にや、戀しい良人の前途を見届けることは出来ないぢやないか。女房を連れて遁げたのも無理はない。自殺を拒んだのも道理だ。しかし、唯一途に忠義と心がはやつて、君のため國のために、夢中で討死をした人達は、なほ氣の毒だ。何爲なら、之は、戀も慾も知らない嬰兒の、呼吸の根を留めたやうなもんだから。」

二十六

新三郎は悵然として、

「いかにも城は怒むべしだ、僕も大に怒む、馬鹿に癪に障る、無法に憎い。」

清瀧の女房大に勇み、

「それぢや矢張、貴方も私どもの仲間ですな。まあ、嬉しいねえ、何うぞね、私も蔭で聞きましたら、貴方まるツ切御酒の上とも思はれません、あの此の娘を見て遣つて下さいな。」

「もしな、おかみはん、」と慌しく遮つた。

「可いよ、人から退け物にされて、まあ、こんな可哀さうな娘はありませんよ。否、世間は廣し、會津ばかりに日は照らないとは存じて居りますが、餘所へ出すのは口惜しい、矢張此の土地で、ソレ見たかと、立派なお婿さんを持たして遣りたいのでございます。」

此の娘も、お母さんの亡つたあとを、直ぐ野にするのは可厭だといつて、我慢して居りますし、

私も悔しうございますから、誰も足踏をしないことは承知の上で、故と、こんな人寄せの茶店を出さして置くんですよ。」

新三郎横手を打ち、

「其處だ、其處ですな、人生意氣に感ず。おかみさん、僕は、僕は今鶴ヶ城を怒むべしと云つたですな、けれども、僕をして、當時此の處にあらしめば、譬へ一合三人扶持を頂かずと雖も、敵の片足も城の土は踏ませたくない。命を擲つて戦ひます、即意氣だ。」

擲つ如く高く笑ひ、

「藝數のない門附の言種のやうだが、是を謡ふんです。其の事を、御承知でもあらう、會津の門閥家の、秋山といふ、退役の陸軍少将に頼まれて、わざ／＼東京から出向いたのだね。何故といふと、藩侯奥平伯爵家の令嬢、そら今度、此地に見えた、先刻城の中で、お前さんと三人出會した、那の竹子姫といふのが、此の暮に、矢張陸軍の現職に居る、然る侯爵の少佐の許へ縁組をするに就いて、其の式場で、持參の土産、舊領地、鶴ヶ城の歌を唄つて、これを秋山の娘が、ヴァイオリニー西洋の樂に合せて、弾かうといふのだ。

其處で、婿方から來た結納の中に、其の方の又舊藩の風景を、今東京で、飛ぶ鳥を落す、名高い畫師に描かした、一雙の屏風を贈つたから、此方も確乎頼むよと、秋山の爺さんが、念を推して寄越したんです。

外國との戦争も、算盤で出来る今時分。維新の節は奥羽の中堅、蒲生氏郷以來世に聞えちや居るけれど、何のザジズゼゾの國の城一ツ、と若氣のいたり。いや、こんな奴は年を取つたつて、お若輩さ、」と横ざまに額の汗を手拭ひ、

「其處で保養旁、東山の、おかみさんの許へ逗留をして、暢氣に寐轉んで居ると、一足後れて來た竹姫の同勢が、町方へ繰込んで、秋山の舊の邸へ御輿が据る。わツしよい／＼とお祭禮騒ぎ、公會堂では其の秋山の娘の音樂の會がはじまる。火花が晝間ツからボン／＼訝へ響くから、こりや午睡をしても居られまいと、其處で出掛けた。

道草に、龜遊軒といふのかね、あの射割が残らず命中といふので、自分ながら、勇氣凜々。

城に差懸ると日が暮れたね、だが良い月夜だつたでせう。

月も良し、時も良し、さあ来い。矢でも鐵砲でも持つて来い。

自分が此處に來たからには、薄も唯の薄にあらず、瓦も唯の瓦ぢやない、苔蒸す石垣にも句を刻んで、末世に傳はるものにしてしよう。

と。
我身ながらも頼母しかつた。

古城

二十七

時に氣清く、月涼しく、松の梢に吹く風も、颯と我が袖に音信
るれば、直に微妙の調を起し、葉末に繁き夜の露も、分け行く扇
にはら／＼と散れば、忽ち五彩の球と成り、葎の下に埋もれた瓦
も、一度我眼に映ずれば金鍬形の兜である。萩の草摺、薄の旗、
満天の星、燦として、鎬を削るばかりの風情、古城の詩、呵して
一氣にして成るべき也と、新三郎も意氣天を衝いて昂然として、
あはれ此の城、掌に在り。開けば章となり、閉づれば句となり、

唱ふれば韻、謳へば律、袖と草と風と月と劍と露と、鏘々として相觸れて、其の響皆金玉と、獨自ら許したのは、唯纒に、大手の趾なる、崩れた石垣の間を潜つて、左に外濠の一方をのみ見た時の感であつた。

「眞先に驚いたのは急に眞暗になつた事だ。大手先から遠く見た處では、唯姿の好い松が二三本、低い石垣の繞つたのなんぞ、いかにもお手軽な。悪くすると、月夜に見る大川端の何處のか、妾宅の跡ぐらゐに見えたのが、何うだらう。急に然う暗くなつたもんだから、雲でも出たかと空を見ると、繁つた枝の裏に月は鏡のやうにかゝつて、其で光を透さないほどな森ぢやないか。

右にも左にも前にも後にも、轟々と、五抱十抱の大木、何の事はない見上げるやうな、黒革絨の勇士豪傑に取巻れた氣がして、大に膽を挫がれたね。

木の香が身に染むと、草は深し、露が骨まで透つて、寒くなつて、急いで、潜り抜けると、直にまた明るくなつた。

城の外で見たのとは、松の繁で漉しただけに、月の色も變つて凄^{すこ}い。

振返ると、森は又尋常の樹立になつて、森ニとして、其の下を越した時は、幹と幹で十重二十重に取圍んだ下闇の濃かさ、凡十町と思つたのが、別に然までもなく、はなれ／＼に、ばら／＼立つて居るばかり。

月の影も根まで射して、細いが、下には律の中を、踏分けた路もある。而して寂して、今來た邊で蟲は静に鳴いてるな。木精で

密と見ると、凹になつて、どんよりして、草の中に水があるやうだつたから、根強い薄につかまつて、伸上るやうにして覗いて見たんだ。」

二十八

新三郎は一息つき、

「今思ひ出しても悚然とする、而して顔を前へ出して、覗くやうにして、見れば見るほど、其の水の色のやうなのが、唯一個所窪んだだけではない、段々向へ擴がつて、然も愈下へ低くなるやうだから、これはと思つて礫を拾つた。

密と向へのせるやうにして、抛ると、づぶ／＼と沈んだやうだつたが、しばらくして、ツンと響いて、訝を返して、どぶん、大洪水！」

ハツと思ふと、思はず、膝ががツくりとなつた。蹠跟と退いて、大磐石を眞平面、疊を合せたやうな石垣の石の、苔の滑なるにひツたりと背を凭せたのであつた。

来る時は、ひたすら路の心づかひにのみ、氣を取られて、一の廓、二の廓、唯假初に爪先上りとばかり覺えたが、思はざりき、疾、濠の深き事、足許に無慮、一千尺。

瞳を凝せば、倒に望遠鏡面の海の月を、夜の山の頂から瞰下す
が如くである。

路は盡きたかと茫然として行むと、石垣に添うて一條、八重葎
の根を幽に、恰も鬣の靡いたやうなのが、蛭りながら、長く高
く通じて居た。

人の通ふと見定めて、心強く、譬へば、主の棲んで色の暗碧な
る、可恐しき淵を遠かる思ひして、汗ばみながらすた／＼と上る。
徑は一曲り、二曲り、三曲り、四曲り、天に黄金を鑲めたる、星
の中なる七曜星、宛然行く人の胸を繞つて、糸もて手足を操る如
く、ぐるりと土堤を七曲り。一點の北斗鎮座の處、其處が丁度行
留で、四邊は板の如き野となつた。

時に、山あり、俄然として目前に近く、天の一方を塞いで頭れ、
水あり、油然と湧いて、湖の如く、縹として碧を湛へ、森あり、
雲の如く生じて、暗夜に異らず三方を遮り終りぬ。

惟ふに人の愛に来るとともに、其の濠來り、其の森出で、山迫
り、星近づいて、天に神将、樹に怪禽、土には阿修羅、水には龍
王、劍を抜き、矢を番へ、牙を鳴し、鱗を立てて、犇々と鎧ひ固
めた、實に／＼、令百由旬内無諸衰艱の靈地や是。

さては本丸のあとかと思ふ。心一たび轉ずれば、奇なるかな、
天の川靜に流れて、山の姿、枝の振、水には鴛鴦の眠ると見るま
で、松に四疊半の響あり、樹立の外には遠花火、夜商人の聲がし
て、池の面、月の前、水淺黄の空を流れて、すら／＼と螢が一ツ。
其の光斜に上へ糸を曳いて消えた處に、一座、見上ぐるばかり
の臺が見える。

新三郎は其處こそ、此の城の絶頂と思つたので、いで／＼と心を励まし、北斗の星に面を向けて、衝と進んで、手探りに草を撫でると、石で疊んだ段が知れた。

五段六段、段を攀づるに従つて眞直になつて、やがて胸を衝いて身の反るばかりに急だから、兎角に及はず、両手を緊乎と草に縋ると、腕を巻いたは葛や否や、裏葉颯と白く亂れて、露のばらばらと降る中を、空ざまにニと輝いて、眞蒼に飛んで亂るゝ螢、幾百といふ數を知らず。

途端に危く、眞倒に、手を放して落ちようとしたが、辛うじて身を支へて、新三郎は生れて以來、はじめて不知火の海の底を潜るが如く、雲の懸橋を渡るが如く、青龍の背に乗るかと思えて、半ば夢心地に身を攀ぢて、纒に足を踏固めると、冷い火の粉の降るやうだつた、螢は一ツ消え、二ツ消えて、續いて一團に倒に下へ落して眞暗な中へ、颯と入ると、穴の半が明る見えたが、驚破地軸を貫いて井戸ありと見る／＼内、上から一なだれに蔓つた同一葛の葉の、葉うら、葉うら、葉うらに隠れ、葉うらに隠れて、纒に三ツ四ツ消えもやらで、其處ぞ底深しと知るべをなすのみ。

二十九 新三郎は城の主の、我を捕らむための弁かど戦いたか、

非ず。俗にいふ、猪苗代の湖の畔、湊村戸の口に通ずる抜六か、非ず。これ蓋し三百年來鹽を貯へた穴藏で、籠城の折から其の床を穿つて取出したが、水晶の如くに凝結したのを鶴の脚で突碎いて、辛うじて使用したと傳ふるのである。

此の穴のある處、天守の趾で、城中の絶頂であるから、一望、曠豁、森颯と退き、山衛と展き、濠は目の下にかくれて、新三郎は一人、雲の中、天守の上に、刻める石像に似て突立つた。

大手から望み見て、土塀六尺、屏風に過ぎず、躍らば越えなんといへる者、正に此處に於て可慚死矣。

山續き、峰連り、頂聳えて、近く層なり、遠く望み、城の周圍凡五十里、天然の城壁たゞに二重ならず、三重ならず、金星あり、盤梯の峰は其處か。水星あり、猪苗代の湖は彼處か、近く越後の飯豊山、遙に日光口、宇都谷峠、見果てぬいろ／＼の雲形も城の模様にも異ならず。

「ねえ、おかみさん、今夜これで二度曇つた。丁度先刻、穴藏の縁で、お前さんに遇つた時も、白い旗のやうな雲が、銀河と二條ならんで、一條づつと開いて、茫乎月を隠して居たらう。

もう氣が遠くなつたやうに、餘り大きな城の景色に、見負けた僕には、晝だか夜だか解らなかつた。

唯其、熊ヶ谷をはなれるとすぐに蕨、奥州の入口からずツしりと大きな重いものの坐つたやうな、其ばかりか、梟は鳴く、朽木は光る、見晴の田圃にも、那處此處、灯が、それとも鬼火か、血か骨かと思ふと、又野にも山にも、敵の旗が群つて居るやうな氣持がする。地の底には呐喊の聲。

其處に立つは我ならず、正に一個史中の人傑、結束して此處に

上つて、山野を壓した敵に望み、白旗を振れば晝となり、黒旗を動せば夜が来るやうに思ふと同時に、

迎もいかん、とても僕のやうな者が、此の城を文字にうつして、ヴァイオリンの音に合せるなどは思ひも寄らん。謡つて人に聞せる處が、助けてくれを呼んだつて、聞えやしまいと失望した。

いかに、自分を知らねばつて、ぬツと押し入つて、然も夜、天守まで登り詰めた、酒亞々々さが可恐しい、と恐入つて氣可愧しく、穴へ入りたいやうな氣がして、しばらくあの鹽藏のふちに、腕組をして俯向いて居た。

串戯ぢやない、全く、其の、弱い螢の光にも引入られさうになつて成らないから、待て、こんな意氣地なしは死ぬも可いが、
新三郎は唇を噛んでいつた。

「忠臣義士が討死のあとだ。臆病ものが交つちや、嘸迷惑なことだらう、と、やう／＼顔を上げて、見ると何うです。」

我が影ならぬ女の姿、朦朧として二ツの幻、雲に漂へる趣あり。思はず、衝と眞直に立つと、一人は左へ、一人は右へ、今一人は其の右へ、おされ／＼にぐるぐると、巴の如く穴藏のふちを、一まはりづゝ、正に二度、いづれも顔の色眞蒼で。

三人、皆石になつて立つた、一呼吸で、ばた／＼と齊く倒れようつとした時、凜として清しい聲で、（此處へ來たは誰だえ。）といつた。いつたのは竹姫であつた。

二人はハツといつて土に手をついた。いづれも魔所だと知つて居たから、互に臆氣に顔を見ながら、不思議の邂逅に言は交さず、無言のまゝ物別れに、前後して城を辭した。中に就いて最も餘裕のあつたのは竹姫で、こゝに坐して鬼神にも齋眉かれ給ふべき、女性であるから。

「言語道斷、女の子に叱られて、ハツといふやうな野郎が、これ、豆腐だつて、旨く切れよう道理がない、況やだね。」

何あとで考へる件の姫公も、可恐しい紛れにあんな事をいつたのだらうけれど、何うしたのか、あの時は、何故此處へ來た、と一言いはれて、實際思はず天窓が下つた。

其がといふと、今いつたやうに、兜 ぢやない、此の麥藁の安帽子を、向うへ投げて降参して、酷く打てゝ居たもんだから、はッ、はッてんだ、三太夫、

自ら嘲けるが如くに、

「癩に障るぢやありませんか、僕、我知らず土下座をしたね。」

姫公が又驚かしやあがつて、全く其の時は、僕を叱咤すべく、天守のあとへ天降つた、女神のやうに見え名代のお轉々婆で、人さへ留めなきや馬に乗つて、猪狩にも出かねないんだから、大方人の寄附かない城へ、づか／＼入つて來たんだらう。

だつて豈夫、其の人だとは思はなかつた。勿論顔は見た、顔は確に姫公の顔と見た。そりやいつも一所に饒舌つたり、秋山の娘と一所に、三人で、氣障だね、江戸の市中を小可愧くもなく、馬車に乗つて歩行いた事なんぞあるんだから。第一、そんな心がけだから、城を見て恐入るのだ。

ね、此處だ、聞給へ、先刻、お房さんに話したのを、お前さんも聞いたでせう。そら、榮螺の殻の一件よ。

青天井も同様な、濱の葦簾張に世帯を持つて、女房のくれる貝

殻から、龍宮のひそ／＼話を聞くことが出来るやうなら、何の會津の小城一ツ、手に唾して取るべしだ、驚くことは些ともない。」「古城の歌我に於て何かあらんと、新三郎は憮然として、
「然るに、其をです。其の榮螺の殻は打棄つて、社戸明神の巖端で、別荘の令嬢が弾ずるウアイオリンの音に駈けつけて、いやはや、同一巖に腰をかけて、ウン成程などと、隨喜渴仰を遊ばすやうな料簡方だつたもんだから、姫公の馬車に合乗を名譽と思ふやうな事になる、其の合乗を名譽と心得る始末だから、おかみさん、僕今姫君を稱して姫公といった、いったが、今夜がはじめてだ。現在、先刻までは奥平伯爵の姫君と思つて居たね、姫様といったですよ。」

何うです、其姫様が御婚禮のひろめの席で、唱ふ歌を、仰せ畏んでこしらへるのを、天晴名譽と心得るやうだから、いざとなると、松風の音にも腰が抜ける、吶の聲と聞えしは松風なりけり世の中はだ。然も何と、口約束をした汝が媽が西洋だらうが、何だらうが、絲に合せてチンなどと、御入來のお客様のお聞きに達しようといふんぢやないか。

何ともどうも、媽のろの隊長、二本棒の繼梯子だ。男子天窓に油をつけて、満座の中で、汝が媽の絲に乗せる歌をつくらうなど、あきらめたら、首くゞりの他に何が出来る、大きな咳だつて出やしない。況や古城の歌をやだね。

切めて、切めて、龍宮の聲を聞くことのならぬ耳でも、城へ入る前に此處へ来て、お房さんの松毬から、風の音を聞いて置いたら、恚にだらしなくはなるまいもの！

悔、悔しいが仕方がない。一敗地に塗れて、又再擧を計る勇氣
 なした。しかし何につけても、姫様や秋山の娘は邪魔だ、二度と
 又顔を斷じて見ない。で、此のまゝおかみさん、東山へ一所に歸
 つて、翌日は東京へ出奔だ。かけおちです。

敗軍の將は共に兵を談ずべからずだけれど、姉さん、君のお酌
 を頼む。いかにも松毬が氣に入つた。蘇がへつたやうな松風の音
 だね。大きいもので波々と一ツいかう、敢て玉手を勞する、呀、
 構はず、鑿を倒に持ち給へ。」

姫神

三十一

「あれ、松坂さん、何方へ。否、此のまゝお歸り遊ばしては、
 此の娘が可哀相でございます、お媒妁人なんですもの、黙つちや
 居られませんか、お開きになら私の方がいたしませう。」と軽く留
 めて打微笑む、女房の袖の端を、お房は下に居て、引いて、慌し
 く、

「もしな、おかみはん。」

新三郎は左右を見遣り、

「いや、何處へも行かない、何處へも行かないが、こんな話を、面と向つて遣られちゃ、僕だつて大いに照れる。あとでよく姉さんの氣も聞いてくれ給へ、僕は心の變らないのを、神明に誓つて来る。」

かた／＼靜に其の胸を鎮めようと思つたので、森の中を透して尋ねた。

「お堂は誰を祭つたんだね。」

「摩利支天様ですよ。」

思はず、

「荒神だ、酔つて居ちや失禮か。」

「否、此處の摩利支天様は、優しい、天女の御像で、殿方の弓矢、劍術、女の針仕事まで、一切、藝事をお授けの御願だと申しますよ。」

「南無、藝術の、はッ。」

頭を下げようとして、其まゝ、よろ／＼と前へ、新三郎は廂を出た。

「謹んで髓縁し奉らう、おかみさん、直ぐ歸る。」

「行つて入らつしやい。」

「お早く戻つておくれやす。」

虜中白骨行應朽

樓上紅粧尚思歸

「キーツ、」

きり／＼と齒を嚙む音、飯豊猿の惡權太、五尺の鐵砲の肩をかへ、銃口を今、御堂の路へ獨り出た、新三郎にじり／＼と向けた、背後でばちりと扇を疊んだ、秋山の令嬢衣子は、靜に提げて居た、錦の袋、ヴァイオリンの小さな包を、急に袖の下に高く抱へたのである。

當時樂壇に美名を馳せて、斯道の工匠といはるゝ人、今日故郷の公會堂に、小學校の生徒の唱歌、教會連の讚美歌をませた、女教師のオルガンなど、十數番の番組の其の眞打を厭な顔もせず勤めた歸途。

裏の畠でポチが鳴いたり、向うの山へ狸が飛んだり、エン、ヤラヤアと腕車を推したり、耶穌が罪を清めたり、雑巾かけたりする對手の、奏樂者お衣さんは、氣の毒で見居られぬと、臨席しなかつた竹姫の、鶴の城の抜け駈なんぞ、衣子は夢にも知らないのであるから、其の姫のために城の歌作らむと、先んじて會津下りをした、人も知り、互に許した新三郎。

扱て姫いよ／＼入國して、全市鼎の湧くが如く、菩提所の坊さんまで、輪袈裟で伺候する中へ、先生顔出しもしないので、姫は心にかけないまでもと、氣を揉んで居た處。

音樂會も早く濟んで、幸ひ姫が一所でなし、折もよし、月もよし、歸りがけに東山、清瀧までは程近しと、衣子は田舎の燕尾服、羽織袴がずらりと出て、宅まで送らうといふのを斷り、あれ御家老様のお娘御、江戸さ一番の藝者を拝めとどいやどいや、停車場のやうに寄り来る中を、颯と腕車で駈けぬけさせ、灯しかさねた

軒提灯のきぢやちんの、セツが三ツ三ツが一ツ、いつか背うしろに遠花火とほはなび、星ほしはら／＼と町まちはづれ、湯川ゆがはの岸きしを東山ひがしやまへ、淚橋なみだはし近ちかうなる、畑はたの彼方あなたに月つきの森もりあり。

傳つたへ聞きく野郎やらう構がまの摩利支天まりしてんは、姫神ひめがみにておはします、文藝ぶんげい守護しゆごの御誓おんちかひ、手習てならひするにも、文讀ふみよむにも、衤おくさきの針はりを持つもつにも、幼をさなき時ときから信仰しんかうして、甘あまえるばかりに願ねがひし御堂みだう。

人は知らじ今夜こんやの奏樂そうがく、當代たうだいの學者がくしや、學生がくせい、紳士しんし、貴夫人きふじん萬衆ばんしうが拍手はくしゆの中に、上野うえの、神田かんだの大會たいわいに、奏かなづる時ときの比ひにあらず、我われながら自らみづか許ゆるす、心清こころすいしき出來榮できばえも、靈みたまの前に跪まへひざまづきて、鰐口わにくちの鈴すずの緒をに縋すがると、おなじ思おもひのしたればならん。

あら尊たふとや。十年ねんの苦くありとはいへ、ボーゲン（ヴァイオリンを奏かなづる弓ゆみ、）の持方もちかた一ツ習ならひ得えしさへ、皆みな姫神ひめがみの御利益おんりえき。

三十二

薔薇さうびの雪ゆきの薰かをる時とき、電燈でんとうの花はなの輝かがやく時とき、女王にょわうの如ごとく迎むかへられて、自らみづか學まなべりと思おもひつゝ、己おのが姿すがたを水鏡みづかがみ、うつす高峰たかねの月つきや忘わすれし。忘わするゝとしもなけれども、年久としひさしうして故郷こきやうに來きて、取紛とりまきれたりとはいへ、未だいま御堂みだうにも參まゐらずと、湯川ゆがはの瀬せの音おと、松まつの風かぜ。森もり

の影空に澄み、畑に星の露を眺めて、衣子は悚然と寒くなるまで、尊く畏く勿體なく、あはれ懐しくも床しくなりて、心漫に腕車を下りた。

其時、深張をついて下りたが、川風颯と裳を吹いて、袂涼しく肌冷く、其朱鷺色の長襦袢も、秋の草の縞の一重も、唯肩にかけて朝霧を身に絡うた心持の清々しく、駒下駄も浮いて軽きに、土筆鼓草に馴れたる路なり。舊より畑中の薄を分けても腕車が通るのではないのだし、御堂へ参つて裏路から、東山もつい近し。待たせて置くに及ばずと、供の車夫を歸さうとして、顧ると、畏つて母衣を撥ねたが、譜本を包んだ風呂敷包を、腰掛の中へ入れようととして、焦茶の天鵝絨の高臺を外す時、膝の上に乗せて居て、今下りるとして差置いた、ヴァイオリンを、蹴込へ心なく下したのを見て、自分も人も踏む處と、衣子は不圖氣になつた。

其のまゝ腕車に預けて歸すが、心無いやうに思つたので、取替へて涼傘を。

ヴァイオリンは衣子が自分に。それから御堂に詣づ路、幼馴染の畑を縦に、枝豆の葉影を拾うて、羅に染む夏の月、遠音に村の若者が、妻を呼ぶ尺八のをかき音も、姫神の御前に導く、草刈る童の笛かとはかり。

衣子はいそ／＼と蓮歩を運んで、ばツさり行當つた唐黍の自然生。

潜つて土手へ上らうと、見るや向うの薄の中に、行燈に青き馬追の宿るやう、一軒、月に葦簾の茶屋。草の茂にあからさまであつた。

時に男の高調子、束の間も忘れぬ聲、後姿も正に其の人。

清瀧樓の晝寐が覺めて、月の湯川を辿りしが、さるにても微妙きかな、御堂に參るは我がためのみか、雪にも花にも手を携へて、おなじ園生に遊ぶ人の、冥福をと共に祈るにこそ。しばらく逢はぬ戀人なり。衣子は飛立つ心を鎮めて、軽く不意を打つて驚かさむ、搦手からか、大手からかと、四邊をすすと思議の怪物。飯豊猿の權太である。

つまも籠れる葦簾の中へ、敵意を挟むに相違がないから、衣子は、忍びやかに、様子を見て居た。然るに清瀧の女房が、過去りし物語と、新三郎が鶴の城の述懐とは、彼一句、是一語、極めて濃かなるものであつたが、時間は半時に満たなかつた。時々男の爽なる聲、衣子には意を傳へず、きれ／＼に聞ゆるばかり。唯醉へる事のみ明に知れて、これを其の人の瑾に瑕と、柳眉を寄せるばかりであつたが、しかし、其の間に權太郎が爲せる舉動は、あまたたび衣子の見る目を驚かしたのである。

他なし唐黍の莖を、向齒に嚙り切つて、密と手で倒まにしたのである。衣子は、はじめ、土を嘗めるのかと、傍目も觸らず視める間、泥に片頬を埋みながら、犬が干物の骨をしゃぶるが如く、がり／＼と喰ひはじめ、やがて根を放すと、横にして、膝を立て、両手で握つて、穂の下へかぶりついた。が、頭を掉つて喰切つて、残さず葉を二ると、づんどにした青い軸、手に長きこと約五尺。

べたりと葡萄匐ひ、兩膝を再び折敷き、胸にあてて、眞直にして、尖つた先を、衝と件の葦簾を的に差向けた。お房の姿の動く時、新三郎のものいふ時、清瀧の女房と、いづれを打たんと三人の一人、迷ふか銃口をまはしながら、眼を光らし髪を動かさし、足を踏

ばり、身もだえして、手許の頬桁、息を白く、消すまじと、吹いて、フツ！ フツ！

飯豊山の獵夫は、瞋恚嫉妬の炎を吐いて、つらき女か、憎き男か、とりもち顔の女房か、唐黍の鐵砲に吐く呼吸の火繩をかけて、唯一發と狙ふ身構。詩吟一聲、新三郎が床几を放れて路を出た時、肩を揺かへ、瞳を轉じて、驚破！

衣子は見る目も危く、堪りかねて、トン、と足踏をして、つゝと出た。

惡權太驚いてヌツクと立つたか、縁の下に犬と寐るから其の女主人の家主様、摩利支天の御像見るやう、艶麗に氣高い、姿を一、目、あとしざりをして、白眼、唐黍の銃を投げると齊く、踵を返して背後影、猿より疾く見えぬ。

「あなた、さ、お薬、あとで冷水を召食れ、さあ。あなた。」
コップを片手に、片手には、露の小粒の薬を据えて、衣子は、新三郎の然も痛苦に堪へないやうな、眼を塞いだ顔を覗き、

「まあ、苦しうだこと。松坂さん、あなた大層酔つたのね、一口召食れ、清心丹ですよ、合薬ですよ。」

五三の桐の定紋を、金時繪の蝟色塗の香箱は、薬を振出したまゝ、しまはないで、檻褸錦の御守殿持の紙入と一所に、淺黄の紹繻珍蝶々を白抜なるを、心なしの太鼓にきりゝとしめた、帯の間に挟んで居る。新三郎の口に寄せた薬の色は、薄曇りの月に、指環の寶石は、本堂の狐格子の藏の中から一條さし出づる燈明の灯に映じて、共に燦然として輝くのであつた。

新三郎は階の上の眞正面、観音開きの片扉に、ぐつたりと背を凭せ、敷居に腰、両手を膝頭に組んで、砂だらけの廻廊に脚を立てながら、仰いで、眉を顰めて、幾分の冷さを得んと欲するやう、後脳を板戸に擦りつけて、切なさうに口を利かず。

彼はお房の葦簾張を辭して、森の下を一文字に突進して此處へ來ると、はつと勢よく禮拜をするや否や、はじめから怒る體裁であつた。

衣子は惡權太を見送つて、横に薄原を抜けると直ぐ後について來たのであつたが、二三度聲をかけても返事せぬ、新三郎の様子を見て、薬をと思ふ、水がなし、手水鉢は木の葉の下ずみ、心づいたのは葦簾の茶店で。

それから御堂を伏拝んで、男の傍へ、ヴァイオリンを差かけると、扇を帯に、俯向いて深くさしたが、急いで引返して駈出した、

おとなしやかでも、學校育ち、恚うなると、やがて、水呑ともう
一ツ、藥罐を借りて戻つた、疾い事。

新三郎は其の間に、一度眼を開いたが、下蔭を彼方に走る秋草
の姿を窺はんとせず、懶げに、じろり傍なるヴァイオリンを一
目見て、又眠る、酔に蒼ざめた顔の色は、一層慘憺たるものとな
つて、無量の懊惱を露して居たのであつた。

「あなた、あなた苦しいの、又いつものやうに吐いちや不可ま
せんよ。身體を痛めますから、我慢しておあがんなさい。さあ、
身體を男の横にして、

「飲まして上げませうか、一寸、いつか貴下、矢張酔つて苦し
がつた時、姫様から紫雪を頂いて、夢中で姫様に背中を叩かして
さ。そら、あとで耳聾を見て大テレに照れちやつて、この藥は
紫の雪ですな、お手づからでなくつては頂戴出来ない、天上の
靈藥、恩賜の紫雪だつていつた事があつてね。

そんな窮屈なんぢやありません、私のは一寸、君に奉る御藥よ、
胡蝶と申す女でなくツちや厭ですか。」

警句一番して莞爾すると、藥は吸ひ込まれたやうに美しい掌か
ら手も動かさず男の口。

ガリノ、と邪険に嚙んで、唇に近かつた水呑からがぶりと一杯
咽喉に支へたか、がぶり、と飲んで、ごくりと通つた。

新三郎は我知らず、水呑を取るに先んじて、衣子の手首を壓へ
たので、織き腕は力なく揺れて、水は膝へざぶりとかゝつた。

故とたしなめるやうに、

「亂暴ねえ、御覽なさいな。」

といひながら左の袖を上へ上げて、軽く振動かすと脇あけから、ちぎれたやうな襦袢がこぼれる。

「おや、手巾を落したよ、」と、直にかけた男の膝、朱鷺色の霞を隔て、衣子は密と手を取ったが、水に濡れたかヒヤリとした。

「冷いことね。」

三十四

襦袢の袖の溢れたまゝ、はら／＼と媚かしい、年紀も二ツ三ツ少やいで、衝と廻廊を彼方へ去つた、欄干の横木十字の角へすらりと立つて、乗出すやうにして、高く月に水呑を透かして、斜にして、くるりとまはして見た。

底にまだ残つて居たから、猶豫はず、ぐツと干して、不圖、
「水杯ね、」

と思はずの振で笑つて言つたが、心付いて、

「おゝ。厭な。」

背後うしろざまに其水香そのコップを蔽かくすと、亂みだれた袖そでに引ひきかゝつて、袂たもとに入は入ひうとするのを、はづして、帯おびの結目むすびめに伏ふせた。振返ふりかへつて、斜なぐめに見みると、新三郎しんさぶろうも又目まためを開あいて視なめながら、得えもいはれない顔かまをして居あるので、衣子きぬこはあらたまつて極きまりの悪わるさう。黙だまつて、しばらくして、優やさしく睨にらむ眞似まねをして、酔よの覺さめたらしいのを嬉うれしさうに、

「酔よつてます、詩人デシテル。」

「酔よ……」

聲こゑは異様いざうなものであつた、頃刻しほらくくひしばつて無言むしんであつたゝめか、嚙かみしめた齒はに、かすれ／＼。

「酔よ、酔よ、酔よはないで、令れい、令嬢れいぢやう、お、水おひやを最もう一杯ぱい。」

「上げませうか。」

衣子きぬこはいそ／＼傍そばに寄よつた。並ならんで、水差みづさしを取りながら

「氣きがついて？ あなたまるで夢中むちうだつたわね、先刻さつきわたし私が來きた時ときなんか、傍そばへ寄よつても顔かほも分わからないくらゐなんですもの。お薬くすりを上げませうと思おもつても水みづがないもんですから彼處あそこの茶屋ちややへ行いつて借かりりて來きたんですよ。知らない顔かほですから、いきなり道具どうぐを借かりりるのをかしく思おもはれると悪わるいから、簪かんざしを抵て當たいに置おいて來きたの。否いへね、其それには及およばないで貸かしてくれさうだつたんですけれど、また世帯しよたいを持もつてね、お金子かねに困こまる時とき、何なにかの、あの稽古けいこだと思おもつてね。」

「一たび其口そのくちを開ひらかば、正まさに城しろをも傾かたむくべきが、簪かんざしを質しちに器うつはを借かる、松まつに羽衣はごろもを脱ぬぎかけた、三保みほの浦うらの風流ふうりうあり。抜ぬいだのは、桔梗ききやうの花形はながたに、寶石ほうせきの星ほしを聯つらねた、金脚きんあしなるものであつた。

「經營けいえい慘憺さんたんでせう、だつて苦勞くらうをさせるんだもの、貴方あなた、相濟あひすまない譯わけね。」と莞爾にっこり。新三郎しんさぶろうは默然もくねんたり。

「でもお酒だから可いんだけど、これがもし本當の病氣だつたら、何うでせう、」

「眞實よ。」と老實にいつて、はじめてほつと小さな吐息。

幽に目を開き、

「眞實？ 何が眞實ですか。」と屹といつたが、要領を得ないこと。

「眞實つて、え、眞實ツて 然うぢやありませんか。あなた眞蒼になつて苦しうで、見て居るものが辛くつてよ、病氣でこんな容體だつたら大變ぢやありませんか。」

「打棄つてお置きなさい。」
優しい目で、

「又？ 屹とよ。酔ふと我儘をいつてしやうがありやしない。何時かもしこんな晩ね、ホテルの歸途に、築地の海岸を二人で歩いて居たら、何うです、急に思出して、逗子へ行きなくなつたつて、これから直に出掛けるなんてさ、憎らしいから、勝手に御執心の龍宮の聲でも聞いておいでなさいといつたら、まさかと思つたのに終汽車で、社戸まで行つて来てね、それなんですもの、」

といひかけて、
「忘れて居たこと。さあ、冷水、もう酔つた介抱はして上げまいと思ふけれど。」

姉が弟にいふ如く、

「だつて可哀相だから、厭ね、お酒がまだ香ふよ。ほんたうに姫様ばかりぢやありません、今夜なんざ、私のだつて恩賜だわ。」

「打棄つて置くが可いです。」

「打棄つて置いて何うするの、」

「死ぢまへば其までです。」と擲つやうに云つて面を背けた。

其の顔を追ふやうに、情の籠つた、さかしい、涼しい目を働かして、

「また、そんなことをいつて、姉さんもう世話をしないから可い、駄々兒ツちやありやしないよ。」

「えゝ、駄々兒ですとも、工匠！」

向直つて新三郎は言ふ聲に力を籠めた。

「僕は駄々兒です、意氣地なしの骨頂、野呂間の素天邊、二本棒の繼階子だ。貴女のやうな、陸軍少将の令嬢で、音楽界の花形で、下谷一番伊達者といふのに、酔つばらつた介抱をして頂くやうな、氣の利いたんぢやありません。打棄つてお置きなさい、へむ、一人姉さん下谷にござるだ。」

新三郎はボンと手を拍つ。

「そら、ね。」と笑つて居る。

「何の、何の人をつけ、おもしろくもない、意氣地アなくても、智慧がなくても、これでも江戸ツ兒のはしくれた。チヤンと打つけりや目を醒す、火事に如才はございませんが、ヴァイオリンの合方で、棟割長屋の、夜があけて堪りますか。小兒は泣出す、犬

は吠える、お附合迷惑で大屋様御難儀だ。串戯ぢやない。」

「そら、ね。」と笑つて居る。

「お衣さん。」

笑つて答へず。

「令嬢、令嬢。」と、聲高に呼んだ。

「厭ね。」

「貴女惚れてますね、僕にぞつこんだね、ぼつと来て居るんですな。」

「知らないわ、私。」

「否確に惚れて居ます、又、惚れて居なくつて、此の世話が出来るものか。世の中にや、貴女に一寸見られたばかりで、天窓からぞつとするものが無数ある。酔ざめの水なんか飲まして貰つて御覧じろ、氷の木伊乃だ。僕も惚れてます、何のことはない、ひれふしてゝすな、御足の指に接吻し奉るくらゐ惚れてるんだ。兩方惚れてるから、此の縁よとよる、大吉だね、片や奏樂者片や詩人、凄い取組でございやすな。白蠟細工の、天狗の孫見たやうな小僧の呼出しで、陸軍の少將が馬に乗つた立行司だ。」

「そら、ね。」と笑つて居る。

「ね、惚れて居ませう、けれどもです、けれどもですな。貴女は其の位置を以て、其の風采を以て、甚だ立入つたやうですが、且つ其の容貌を以てだ。いふまでもない又其の藝術を以てだ。一朝すべてを泥土に委して、是を車夫に與へようとはしますまい、馬丁に與へようとはしますまい、譬ひ其の男に惚れてもですな。」

「ね。」と唯笑つて居る。

「又間違つて與へてならうか。今あなたが、其の身體で車夫や馬丁の媽々になるといへば、天が許さん、人も許さん。人ごとぢやないけれど、僕も敢て許さんです。近い話が、姫様だ、伯爵の令嬢竹子姫か法界節と駈落をすると云つたら、貴女は何と、黙つてこれを許しますか。」

「そら、ね。」と笑つて居る。

狐格子

三十六

新三郎は眼を瞋らし、

「敢て許さんでせう。けれども、車夫といひ馬丁といひ、法界節といつて、更に人を煩はさず、一家を營んで居るものなら尚談すべしだ。貴女は何と、くだいが、其の位置、藝術、風采の一切を以て、こねを城の番人に與へますか。」

城の番人！

僕がこゝに云ふのは、戈を横へて城門に立つて、敵を防ぐ勇士

といふ意味ぢやない。大手前の番太郎だ、菖蒲草の袴で六尺棒で、
徒士があつても土下座をする、いや、其にも劣つた、折助仲間、
緞賣の類、いざ鎌倉といふ時にや、濠の埋草にもならない野郎で、
一人扶持の食潰し、あはわんで言や、不便なもんだが、手厳しく
掛合へば、禄盗人、賊臣ですな。

得て然ういふ奴は、城の草を取らしても、墓に、目をまはす、
當前だ。」

切齒をして、

「埋草になりや、車前子の方が餘程おためだ。今僕は、僕は今、
畜生！ 此處からも判然見える、鶴の城に對しては、草にも劣つ
た、折助仲間緞賣の類です。打棄つてお置きなさい。折仲の酔ッ
ばらひを介抱遊ばしたなんと云つちや、御家老の嬢様お身の上で
す。貴女お手討もんですぜ、何の事はない、文金島田の投首で、
紫の裾模様、緞子の帯を堅矢の字、緋縮緬の蹴出か何かで、鬱金
の扱帯を長く引摺つて、奥庭の松の立木に縛られて居る方だ、
あゝ、いたはしや、影が薄い。」

御臺様お情で、旨く行つた處で背戸口から落人で、そら、乳母の
家へのめずり込んで、其處で法界節といふんですな。第一貴女御
兩親をどうします。打棄つて置いて早くお歸りなさい。お衣さん
歸つて下さい。」と屹といふ。

「貴方、私一人だわ。へぐれけのレケちやつた處なんか見られ
たもんだから、極が悪いもんだから、いろんな事をいつてさ、あ
なた、お酒をあがると何時も然うよ。私やもう厭だけれど、お父

さまなんか、其處が好いんですとさ、そして何時でも然ういふの。新三郎さんが酔つていふ、あのふう／＼を一絡めにする、一陣ぐらゐ、進めツて、號令が出来ますとさ、現在のなんぞ例より壮だから、三軍を叱咤するのね。」

聞きも果てず、

「ど、ど、何ういたし、ぐうの音も出でず、ぐうの音も出ないんです。城、城のしの字も出ないんです、城の歌なんか出来るもんか。」と思ひ餘つて心の裡を。

衣子フト氣がついて、

「あゝ、貴方、それでお酒を飲んだのね。」

「。。」

「道理で、姫様が入らしたのに、顔出しをしても下さらないでさ。それだから今夜、東山へお迎に行かうと思つて来たんですよ。」

畑の向まで来ますとね、思出したと云つては勿體なうございませけれど。」

片手を上げて伏拝み、

「此ね、摩利支天様は、私か小兒の時から信心してね、まるでおねだり申すやうにして居たの。」

新さん、あなたや、私たちの神様ですよ。何うぞ、新さんも立派なものが出来すやうにと、お願ひ申しに来たんですわ。何もそんな顔をしないたつて、私たちの思でも出来すよ。」

「何うして！ 何うして！」

「否！」

「企及ぶべからず。せめて濠の埋草ならいけれど、折仲だから逆も不可ん。しかし、口惜いです。實に無念だ。僕はもう、爪でも長かつたら、一念で、城、城の石垣に切めてひつかき疵でもつけて見たい。」

「まあ、あれ又そんな顔をしないでさ、ですから御酒なんかあがるなよ、よ、新さん。」

と眞心から、引添うてしめやかに、

「父上てばね、あなた、あなたは酔つて三軍を叱咤したり、號令をかけたりなんぞなさらなくても可いの。他に仕事があるんだもの。さ、上げますよ。冷水でもあがつて、判然して下さいよ。だから、いつでも、およしなさいツていふのにね。」

果は弱々と言ふのであつた。

三十七

「眞實に、酔つちや何にも出来ないわ。」

「お待ちなさい！」

新三郎は片膝を立て、開直り、

「何酔つちや出来ぬ？ 以つての外だ。此の、此の酒あつたればこそ、未だ幽に絲のやうな望を繋いで、薪に臥し、膽を嘗めて、僕も聞いた、――此の、藝術守護の摩利支天尊の破堂の縁に立籠つて、纒かに筵旗を立てるの勇氣があるんです。」

然うでなくツても、僕をして酒なからしめば、元來、榮螺の中に海神の宮殿を見る能はずして、奏樂者の姿に魂を飛ばす折仲だ。疾の昔、衣の襟高きこと八寸二分、散髪の分け方骨髓に入つて、洋服に羽か出来てね、巨匠の袂に、ぶらさがつて、半巾の面縛で、死刑をうけ、魂魄此の土にも留まり得ないで、愛神のお茶漬、晚餐の餌ともゆきませんや。」

一體あの小僧なんか、何を食つて生きてるだらう。車夫をやるでもなし、馬丁をするでもなし、何をして生きてるだらう、恐らくわれ／＼を喰つとるのだ、われ／＼が其の餌食であるとして見ると、僕なんか、お香物でお茶漬の方で、貴女なんざ本膳七五三だね。否、事實。あゝ、おなじ餌食なら氣の知れない愛神にやられるより、如かず、龍宮の細語を聞かうと心がけて、昔から手心の知れた魚の餌食となる事だ。」

堪りかねて、

「貴方。」

「新さん、私一人だわ。」

「私一人だわ。」

「……」

「私一人だわ、新さん。」

「勿論、秋山令嬢唯一人、僕は酔つてテレ隠しに、見榮をいふのでも、太平樂を並べるのでも、駄々を捏ねるのでもありません。僕はもう些とも酔つちや居ないんです。お互に身體は清し、何にも疾しい處はない。僕は折助たることを知つた、仲間の女房に女工匠は荷が重い、實に天下の不經濟ですから、斷然と別れませう。相濟まん。全く相濟まん。かゝる車夫馬丁に劣るものとは知らなかつた、あなたと手を携へてと思つた大なる望は、しかし、貴女を欺いたんぢやありません。また自ら欺きもしなかつた。自分は信じて居たんだが、己を知らざる、甚しいものがあつたんです、別れませう。」

「まあ。」

手にひかへた冷水の水香を取つて、新三郎はぶる／＼と震へた。

「水杯。」

「え。」

「謹んでわかれの水杯。」

「縋りついて、

「ま、ま、待つて下さいよ、新さん、全くなの。」

「もう同一ことは言ひません。」

「ぢやあ。」

衣子は口早に息忙しく、

「それぢやあ、私、折助でも仲間でも可うございますよ。新さん、そんな、そんな仲ぢやありません。」とばかり、呆れ顔に茫然として、餘の事に、

「私や、涙も出ないんだもの。可いわ、折助でも。」

「否、そりや不可ん、そりや不可ん。それだと僕が今謂つた、天人ともに許さん事になる。第一差配さんが迷惑、小兒は泣出す、犬は吠えるだ、折助長屋にヴァイオリン。」

新三郎は傍に蒼く幽に光ある、秋野の露に月の影射す如き、錦の包の樂器を見て、片手にこねを取上げた。

「先づ、其方へお取りなさい。で、僕は杯を此方に持つ。」と云ひかけて、衝と立ち上つた劍幕に、桔梗、刈萱、女郎花、あれ、吹き靡けたやうに衣子も立つた。羅の袖もはら／＼して、

「何うするの。」

「そして此ツ切分れませう。」

三十八

「それとも、今、たつた今、其のヴァイオリンを擲ちますか、ボーゲンを持つた手に鍋釜を提げて、折助の飯が焚けるか何うです。もし然う決心を下さるなら、天人とゞも許さないでも、山の中なり野末なり、これから二人で駈落ちしませう、何うです。」

「そりや、何ですけれど、いくらも私は。」

「ぢや、其のヴァイオリンをお棄てなさい、目の前で大地へ投げて下さい、松風や浪の音なら、擦違つても気がつかないが、蒲鉾小屋へヴァイオリンぢや、目に立つて仕様かない。」

「だつて。」と人形のやうにしツかり抱いて、悄然としたのである。

「不可ますまい、又、可いッたつて、僕がさせない、天がさせません、人もさせない、思ひ切つて別れるです。」

衣子は堪へかねて、身を揉んで、
「だつて、今、今、だつて、新さん。少し考へさして下さいな、もう何うしたら可いだらう。」

「いや、決心は瞬間です。僕だつて、僕だつて、此の、此の決心は明日までは堪へられない、一秒時。」ときれ／＼に云つて聲をくもらしたか、

「えゝ。」といふより、其の自ら誓つた、別れの水を毒の如く、突立つたまゝぐツと仰いで、衝、投げると、水呑は白い絲を曳いた。

「あれ。」

衣子は恰も其の地に落ちざるに先んじて袖で受けようとしたやうに、階からドンと下りた、立竦んで、見る／＼涙頬を傳ひ、

「まあ、まあ、新さん、それは借りて來たのぢやありませんかねえ。」

痛切なる聲して、新三郎、

「其かはりに置いて在らつしやつた簪を、茶屋の娘にやつて下

さい。」

衣子は瞬もしないで居た。

「ぢや、又社戸の姉さんか出来たんですね。厭です、いくら、いくらあなたが、そんなでも私は厭です。簪は記念といふぢやありませんか。それだけれど、私未練ぢやないけれど、こゝで此のヴァイオリンを棄てる決心が出来ないから、あなたの心が鎮まるまで一度お別れ申しませう。お別れ申しますよ、別れて参りますけれど、路々も考へてね、直にも引返して来ますから。」

と聲も心も沈み果てた、頭を垂れて一步二歩、衣子のうなだれて、行く姿、優しく氣高く、うつくしい。唯見る此の世の人にあらず、月宮の美姫罪あつて、流罪の雲に乗れるが如し。

新三郎は爪立つて、伸上るまで見返つて、唯一聲、

「お衣さん。」

片手にヴァイオリンを抱いたまゝ、衣子の最後に見返る時。

「たとひ僕と別れても、あなたはマイステリンとして、些とも變つたことはありません。」

「あなたは？」

「僕は。」

「詩人。」といつて爪尖に力を入れた、衣子は駈出して戻らうとしたが、一髪動かず、描ける如くに突立た戀人の姿を一目。いはれあるべし、聞かぬが如くんば、我渠を棄てざれば、海神の宮殿に参じて、城の歌作ること能はざるべき也と、さかしき人は歩を轉じて、蝶々の帯、薄の裳、寂しく松吹く風に消えたり。

新三郎は倒れようとして、二と狐格子の扉に怗つた、響に揺れて、がたりと上から、肩にかゝつたものがあつた。

「まあ、何う遊ばしたのでございます。」
来たのは清瀧の女房で。

三十九

「お房も案じて居りますよ。おや、今入らしたお嬢様は何處へおいでなさいましたえ、松坂さん、もし、松坂さん。」

「おゝ、かみさんか。」

「何うなすつたんでございます。お嬢さんはお見えなさらぬぢやありませんか。」

「追拂つたです。」

「え。」

「様子でも知れたでせう、彼が即ち、僕をして、姫公に土下座をせしめる婦人だ、思切つて追返した。」

と新三郎太息をついて言つた。

「だつて、あんなお美しい嬢さんを、何うしてあなたは。」

「何うしてたつて死ぬほどの思だ。一生懸命、なか／＼これが容易な事のできるものか。」

女房は深く頷き、

「皆、お城のせめてせう。」

「勿論。」

「怨みですなえ。」

「僕はもう、怨みが通越して無念です。此の力足らずとはいへ、何の城一ツ、城一ツ驚くことはない筈だに、それが、矢張、姫公に土下座の料簡から起るんだ。其のために、秋山の棄てたと思ふと口惜しい。おかみさん先刻、簪を置いて来たでせう。彼は、お房に遣つて宜しい、秋山の女の飾を奪つて、お房の髪に翳すんです。悪魔のわざだ、夜叉羅刹の舉動だ。しかし、社戸の巖端に美人が弾ずるヴァイオリンを棄てて、改めて龍宮の細語を、榮螺に聞く、少くとも松ぼつくりから風の音を聞く誓の験だ。何のこれならば城の歌、何の事が、と思ふけれど、胸から割つたやうに、身體半分削り取られた心持で、あの秋山に分れても、未だ、歌の其の緒だつて見出さない、分らん、些とも分らん、おかみさん、僕は何うして居るすかな。」

「女房近く寄つて、とみかうみ、」

「否、弓を持つて在らつしやいますよ。何うしてなえ。」

「弓を？」

「新三郎は愕然として、唯見れば弦を挟んで、肩にかけ、弓杖を支いて扉に凭れた、思ひもかけず凜々たる勇士の如き己が姿。」

「おゝ、こりや今、僕自身、自分の魂が抜けたのかと思つた、後姿が、向うの松のかけにかくれた時、何か上から来て胸に障つたものがあると思つたが、何うともなれ身體と、別に氣をつけても見なかつた。それぢや、此の弓！」

「奉納の額のございませう。」

女房も廻廊に上つて、並んで上を仰ぐと白い、新な額面は龜遊軒の一連が、謹上再拜のそれであつた。
添へて二條、白羽の箭。

「何うしてこれが落ちたかね。」

目を瞑つてものをもいはず、しばらくして、雲の晴れたやうな面色して、女房は悚然とした。

「もし、摩利支天様のお授けです。」

「お授けです。」

これには答へず、廂が低いから、女の手でも抜くと取れた、矢を持直して、押頂き、

「一矢遊ばせ、松坂さん、あなたの弓のお手並は、私が拜見いたしました。思ひ切つて、一心に射て御覧なさいまし、さあ、貴客。」

「何を、的は。」

「お城です。」

「」

「ね、怨ぢやありませんか、憎らしいぢやありませんか。口惜しいでせう、無念でせう。敵とも仇とも、障礙とも思つて十分に射ておしまなさい、もし、お分りになつたでせうね。」

新三郎、身ゆるぎをして、雀躍し、凜々しき面に笑を湛へた。

「應。」

「お分りになりましたでせう、さあ、あなた。」

「應。」

時に三日月を大きく抱いて、弦を引いて衝と放した。ぴんと鳴つた。

取直して、片肌を脱ぐと、筋がしまつて肉が震へる。

女房が片膝ついて、上へ捧げ出す矢をそばめて、屹と彼方の空を望んだ。

雲開けて、月小く、描ける如き城の趾、墨繪の松の梢に在焉。

ガツキと番へる。

「南無摩利支天尊。」と御名を念じて、女房は、ぢつと見詰めて、じりゝと寄つた。

涙橋

四十

「やあ、阿魔、欲しいか、これが欲しいか、ようこれ、欲しいか
つぺい、こら、小いもんだが太く光らあ。」

湯川にかけた涙橋、渡つた袂の路の折れ角、空の色のだんより

と、水も白くなつて曇つたのは、鬼が此の星を盗んだ所爲か、燦々紫に輝く簪を、指のさきにくる／＼ときらめかして、牙を出して莞爾つくは飯豊猿の悪權太。

「こら、何うだ、ふは、やあ桔梗の花簪とけつからあ。やあ、阿魔、汝、夢中になつて見惚れて居るで、ちよろりと鳶に攫はれただ、欲しかつぺいな、欲しかつぺいな。」

裳の雪の消々に、お房は取亂して、土の上。律の宿の星祭、寶石の簪を守つて、唯一人、御堂へ新三郎を見に行つた、清瀧の女房の留守を、どさり天井から飛込んで、聲も出ぬ間に搔攫ひ、葦簾を蹴倒して悪權太、疾風の如くに飛び出すから、兎角うの分別も、ものいふ隙もなく、銀杏がへしの根を亂して。跣足で此處まで追つて来た、お房は橋を渡り越して勾配に膝を突くと、呼吸を切つて起きも上らず、唯唇を動かすのみ。

飯豊猿、渾名の如く、毛だらけの膝を折り、尻を突出して中腰に踞みながら、

「やあ、姉え、欲しくは簪返すべい。己はあ、何も盗賊でねえだ、汝の顔見たいだで、摩利支天様さ御堂の縁の下で寐るけれど、乞食でねえ、獣のう一ツ打放しや、食資も、飲資も、博奕資も出るだんで、何もこれ人様のもの塵一葉、欲かあねえ。たゞ、はあ。邪魔のねえやうに、汝此處までさ誘引出したゞ、別あねえ、返してやるべい。」

ずつと寄ると、お房は其の姿を見るさへ恐しさうに、わな／＼と、震へたので、猿は長脚を高く蹈んで背後へ廻つた。

廻つて、上の方から大きく持つて行く、簪は流星の如く、光を
残して、蒼く輝いてお房の黒髪に宿つたのである。

女は纒に振向いて、眞白な手を腕も露に、嬉しさうに拝む姿。

悪權太厭な聲で、

「拝むわ、拝むわ。」

と言つてゲラ／＼と凄く笑ひ、

「むゝ、拝むわ、そんなえに嬉しいか。簪返して貰つたで拝む
ほど嬉しいか。まだ／＼、まだ／＼、其の拝んだ手、放してはな
んねえだよ、しつかりと合せて居るだよ。苦しくツても放しては
なんねえ、血反吐を吐いても合せて居るだ。身體がしびれても取
つちやあなんねえ。やあ、阿魔。」

と疾くいつた、悪權太の顔の色、芳年が彩色の静面獸陽志の風
あり。

「これ、可いか。そしてお念佛唱へるだ、汝、いま首いぢめて
殺してやるだ。」

「あ、あ、あれツ」

片手を解くと、お房は掴まれた襟を放さうとおさへて、遁げよ
うとして、前へ倒れた、項は玉を伸べて、するりと衣紋が背中へ
抜けると、裾は緊乎と踏留められた。

「■くな、やい。己が、これ、うむと睨んだら、驚だつて遁し
ツこはねえだ。やあ、阿魔、汝、風の吹く時は恐えだらうと思ふ
で、己、汝の家をぐる／＼と廻つただ、雨の降る夜さは夜一夜、
汝の軒下に立つて居たゞ、其の美しい頬げた見では、遠くから拝
んだい。なに、これ、通りがかりの姉えが預けた簪一ツなくなら

かいて、生死の目をするだあに、己がといふと、影を見てせえ、泣くやうにおびえるだ、合點ならねえ。それも唯厭だちうなら我慢すべいが、汝、今夜他に男を拵えたゞ、業のウ焼けて、身體ア油で煮られるやうだア、堪んねえ。だけんど猿や狐でねえ、人間は一匹取換だで汝を殺しや、己も死ぬだ、やあ、阿魔、あきらめて往生せいちゃ。」

月下の的

四十一

「分つたつべい、汝、人の深せつを無にして死ぬだ。己、深せつを無にされて死ぬだ。己が汝に殺されて、汝己を殺すも一ツだ。殺すも殺されるも同だつて、算盤球の當つて見せえ、己が方が引合ねえだ。汝惜しい命だつて。己、獸同然で人間交さ出来ねえだけんど、入んねえ命といふはねえ、蟲けらだつて惜しい命だ。やあ、打つた獸たゞ賣るだよ、己が命も死んでやるべい、二かねえで殺されるい。」と、熱き涙をこぼしながら、拭はむともせぬ手拭の自分の項を巻けるを取つて扱いて、ぐツと押當てた。

お房はばた／＼、左右の手で、空を打つて、
「おかみさんえ。」と呼吸の下。

救は目の前に来たのである。東山の素見もどり、二人此の體につか／＼と寄つたが、一人は飯豊猿を見て、一人はお房を見、齋しく颯と左右に退いた。

先刻から、橋の向う詰にも五六人、影は開いたり、すぼんだり。

「因果娘だ。」

「因果だなあ。」

「忠義の婆さんが、氣が違つて、長刀をつかつた涙橋だ。」

「然うだ、此橋だ。」

など、斷念めたやうに嘯き合ひ、助けんとは固より、寄らうともしないが、駈出して戻る者、腰を屈めて透す人、いづれ、卵の毛で突いても飛上りさうな氣勢であつた。

悪權太齒嚙をなし、

「清瀧のさ呼ぶだあな。はあ、人間は一匹とツかへだ。あの、女房さ、生命がけで汝を庇ふで、何うすることもあんなえだつたい、汝情なし女の、人形だ思つてあきらめて居ただが、もう、色男さ、拵へたで、合點しねえ。呼ぶのは留めぢや。」

こゝへ、清瀧のさ、来て己を留めべいなら、あの人を己殺すだ、人間は一匹取替えよ。一人殺しや、己其場で亡ばるだ。も一人汝を殺さうとはしねえけど、あの人殺して助かつちや、汝、世話になつた義理い濟むめえ。やあ、覺悟しろていは、分んねえか。」

お房は覺悟して、動かなくなつた、しばらくして又手を合せた、

はや、血が流れたかと汗びつしより、それがつめたく氷つたやう、死したる如き黒髪に活々して輝くは、簪の珠の蒼い光。

轡のやうに手拭を、差俯いた咽喉にまはして、權太は己がこはばつた手を、左右から緊め寄せようとして、裳をおさへた足を踏張り、

「念佛唱へる、やい、阿魔、念佛だ、念佛だ、南無、南、南無、南、南無、南、うむ。と一緊め、緊めようとした手を其のまゝ、空を仰いだ、惡權太、怪訝な顔して、足許を視め、左右をニし、前後を顧み、きよろ／＼と首を掉つて、ぢつとして稍少時。

お房を踏跨ぎながら、ぐつと伸び、流の上に目を注いだ。

月晴れ、雲切れ、星動き、凸の水銀、左右に碎けて、岩に乗り、石を噛み、岩に乗り、石を噛んで、脚下に翻へる湯川の水。

唯見ると、岩に乗り、石を噛み、岩に乗り石を噛む、ニの中に燦爛として、目を掠めて衝と錦流れつ。

手を放して、ずつと出て、岸に半身を乗出いて、流れし切の來れる方に大な耳を傾けた。

聞澄ませば、流の音、風の聲と相分れて、別に更に湯川を傳ひ、虚空に聞ゆる微妙音。

之を久しうして、權太眼をニり、足を爪立て、其の音の聞ゆる水上の方を屹と見たが、よろよろして、影も定めず、引かるゝが如く、繰らるゝ如く、胸毛も揺れて心臓に音の徹すと覺しくて、両手を組んで、あこがれて去つた。

知らずや湯川に淵をなす、水蒼く、月白き、巖に坐して、神女

あり。我死なむか、此棄てなんか、包の錦は溪川の行く方も分かず流しやりしが、あまりの惜しさに、唯一曲、衣子は岸に片膝をなげて、先刻に一度ボーゲンに手のかゝると齋しく、雲分れたり、水静まつて、響く名家のヴァイオリン。

殆ど同時に、新三郎は白羽の當つた類の色、月に輝き、見据えた瞳に心を籠めた、胸に御堂の扉を洩るゝ燈明の赤きを浴げたが、あたりにものゝ氣勢あり、姫神差覗かせたまふかと、氣清く、神澄み、骨氷つて、颯と靡いた單衣の風、銀黄金の鎧を吹いて揺ぎの絲も鳴るかとはかり、此のまゝ雲にも乗らむずる、我を忘れてきり／＼きりと満月の如く引絞つた。

銀河斜に鶴の城、其の片翼残れる石垣、押手の拳に手に取る如く、矢頃は遠く隔つたが、青春意氣のはとばしる處、幻の虹を描いて、練絹の絲を空に曳けば、海の宮殿に髣髴たる、月夜の的はじり／＼と狙ふ雙眼に引寄せた。

いで／＼と思ふ、こはいかに、矢羽に震ふ處空の音楽、泣くが如く怨むが如く嘯くが如く、耳を刻んで胸を抉つて骨に染む時、矢尖にちらつく衣子の姿。

美しき星に圍まれて、樂器を抱いて天に在り。

左に外し、右に避けても、矢の根冷く、疾き劍、正に其の胸について放れず、秋の草の彼の姿、森の陰に消えたる時だに、おのが身半ばそぎ落されて、魂の抜け失すると、血汐寒かりし新三郎、目も眩み、腕しびれ、力なえて、藻脱の案山子矢を落した、よる

／＼と蹠踉いで、思はず、はらはらと落涙する。

射損じたり、第一矢。

清瀧の女房、柳眉を逆立て、控への二の矢を、

「貴下！」と取つてさし出すを、屹と見て、打領き新三郎は取直して、再び丁と番へたのである。

思ひ切つて一步を進み、更に秋水の瞳を凝し、姫神の御名を胸に、鎧の袖を揺直せば、白氣再び空を射て、放たずして疾く貫く、矢頃可矣、飛禽の翼縫ふ可き也。

曳固め、きりゝとメめ、兵弗と切つて放す、弓は大浪を打つて返した、矢響き高く白羽の神箭、遙に遙に霏々として、風と相打つ雪一片。

さて手應は胸にあつた、新三郎は見る／＼中、割然として、心ひらけ、鏘然として文字聲あり、腹案成ンぬ、立處に。

【完】